

平成十六年六月

ドウダンニン

竹下 徹

まゑがき

「ドウダンミン」とは、与論語で「ひとりよがりの考え」を意味する。私は、兄弟からも「ひねくれ者」といわれるぐらいであるので、偏見と独断がかなりある。そのために表題は「ドウダンミン」とした。

親が子どもに残せるのは何があるか。何を残すか。内村鑑三は、「後世への最大遺物」の著書の中で、誰にも遺すことのできる遺物は、「勇ましい高尚なる生涯」と述べている。

私めには、

「高尚なる生涯」など考えられないから、「自分史」でもと思つたが、それがまた、思い出すだけに反吐が出そうなことばかりで、とてもじゃない。とは言つても何もしないよりはましだと、懐古趣味的な思い出や家族のこと、つれづれにドウダンミンしたこと等々を記した。

「言霊」と言われるように、言葉には不思議な力が宿るともいい、関心を持ってきた。特に与論語には大和朝廷時代の古き良きものがあり、しかも先人の叡智がその中に蓄積されている。これを後世に伝えたいと、与論語と与論にこだわった。子や孫のために念頭に置いたが、「駄目もと」である。しかし書き残さなければ読むことはない。他人様にはお笑い種である。お笑いだければ幸甚の極みである。

平成十六年五月

目次

1	キンタ	5
2	海路	9
3	ランブ又ほや心	12
4	ヤリバニ	15
5	ミチャルムヌド	18
6	デントーアイキ	23
7	ウヤマサイ	29
8	宿元と家元	35
9	与論島かヨロン島か	38
10	ユリ又浜か百合が浜か	41
11	正月ニゲーと八月ウガン	43
12	誠	47
13	ユンヌ魂	50
14	辛抱を心棒に	57
15	人生はブーメラン	59
16	オオムンダイ	61
17	足を知る	65
18	一粒の米がたどった道	69
19	松竹梅	71

39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
かけ肥	賞味期限	修羅	嫉妬	ブウク人	ピランチカ枕	えさ	日本復帰	健児の塔	死後の歳祝い	墓	霊	火葬の点火ボタン	チュラクナシ	在如	泣き女	与論の心・敬虔	方言札	シーサー	タラソテラピー
130	127	122	119	117	113	111	107	103	99	97	94	91	87	85	83	81	78	76	73

4 0	故郷は永遠の宝	1 3 2
4 1	負は砥石	1 3 4
4 2	煩惱キリテイ	1 3 7
4 3	わるもの家族	1 3 9
4 4	陰陽	1 4 1
4 5	唯我独尊(存)	1 4 3
4 6	眼横鼻直	1 4 7
4 7	肝腎	1 5 1
4 8	鬼手仏心	1 5 3
4 9	ヤンミヤ	1 5 6
5 0	睡眠時無呼吸症	1 6 0
5 1	ピチュヌフトウバ	1 6 2
5 2	ユンヌフトウバ	1 6 6
5 3	言葉コレクション	1 6 9

キンタ

私が幼少の頃、頭にニブトウ（出来物）ができて大きく膨れ化膿した。父が、林清重医者のところへ連れていった。医者は、父に私の頭を動かないように握らしてから、いきなりメスで切り、まわりから指で押し上げて膿を出した。固い芯まで出さないと再発するといふことで、しまいには血もそうとう出た。麻酔を掛けたわけではないので痛いなんのつてそれはなかった。声も出なかった、泣きもしなかった。医者が恐く、ただ我慢だった。その痛さは今も脳味噌の奥に残っている。そこところは直径四センチほどのキンタ（はげ）になった。それで私は、「キンタばが」とからかわれた。ずっと劣等感を持ち、帽子や髪の毛で隠してきた。教員になってから縫合手術をさせたがまだ完全ではない。

当時はソテツの実をすりつぶして塗るぐらいだった。髪を再生させるためにはシヨウガをキンタの部分にすり込めばいいということ、それもしたが駄目だった。

父は、与論小学校に務めている縁で、清重医者様の往診用の馬を借りて帰宅することがあった。その折りに、父が私を抱きあげてその馬に乗せてくれた。馬の皮は、体の本体とは離れているかのように、ぐらつ、ぐらつと歩きたびに右に左に揺れた。落ちはしないかと必死にしがみついた。今だにその馬の感触は覚えている。

私が中学生の頃、回虫や十二指腸虫を体内に持っている人はざらにいた。大便に混ざって生きたのが出てきた。十二指腸虫は、長さ一センチ程で白くて、うじやうじやむらがっていた。回虫は、みみずが白くなつたようなもので、手で捕まえて引つ張り出したこともあった。その駆除にはミミジモイ（海人草）をせんじて飲まされ

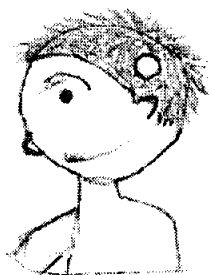
た。効き目はてきめんだったが、しかし、その飲みにくいこと、まずいこと。そんなことを経験しているから、「良薬口に苦し」という諺は納得する。検便があつて、サナダ虫がいると噂された同級生の女の子がいた。それが体が小さく、「道理で大きくなれない」などといわれた。

今、与論の各学校の学校保健教育は、文部省から表彰を受けるほどのハイレベルである。

医療も格段の進歩をとげ、臓器移植も行なわれる。代理出産とか、クローン牛とか、クローン人間造りも試みられているときく。

三十万もある人の遺伝子情報が全部解読されているという。遺伝子によって起こる病気、障害さては酵素、体質まで遺伝子組み換えによつて操作可能になる。またそれに合つた治療薬も作れる。この先端技術競争は激烈をきわめているという。科学技術が発達し、人

間の死、病気、苦しみを取り除いてくれることはいいいことだが、中に悪いのがいて、これを悪用されると大変なことになる。臓器移植で、自分の腎臓、心臓、肝臓を盗まれる心配をしなければならなくなる。クロン人間製造技術がビンラディンや麻原彰晃の手に渡ったら大変。近ごろの悪事横行ぶりをみるとふと悲觀的になる。たかだか五十年このかただが、その変わりようは驚きとしかいえない。ナイフは、医者が握ればメスになり、やくざが握ればドスになる。事程左様に人間の理性、良心が絶對的制御力がなければ物騒である。



海路

終戦も間近かな昭和二十年、米軍の空襲で池田さんの家が焼けた。そこから飛び火してきて私の家も焼けた。家の前のみかんの木やガジュマルは幹の半分以上が焼けたが、植物の生命力はすごいもので、焼け残った裏側で再生し、今はその傷跡を残さずもとの大ガジュマルになっている。私の家から直線距離で四百メートル程離れた北側の家に燃え移り、また次ぎへと燃え移っていった。父は私の次の家の人に謝っていたが、その人も「お互い様」という感じでとがめるふうはなかった。

家財道具もみんな焼かれて、牛小屋の半分に牛と同居で寝起きした。あの夜、姉は南側の井戸に水汲みにいって、幽霊に追っ掛けられて、大きな悲鳴をあげてかけてきた。私はその悲鳴に驚き、入り口のむしろをおろして姉を入れないようにした。母が飛んできてむしろをあげて姉を入れた。「トウラはそんなにした」と今でも時折話す。私もその時のシーンは覚えてるが、入れないように意地悪したのではなく、恐怖心のあまりだった。その幽霊が入っていった林は今はない。

父は、昭和二十五年夏、茶花で材木を買った。馬車を雇う金を節約する為に、徳里叔父と二人でいかだを組み、海岸そいに引いていくことにした。嶺島峰永さんのところから、バナナの苗をいただいて筏の上に乗せて、今の漁港の北側から引いていった。小潮だった。というか干満の差による潮の流れのない日を選んだのだろう。当然足の立たないアイギ等は泳いで二人で引いていった。

トゥマイの浜に着いたときはさすがにほっとした。

そこには父が待っていて、休むまもなく、ぬれて重たい材木を家まで担ぐことだった。私は中学一年生だったが、一人前に一本担いだ。叔父が結構使えると誉めてくれたのを覚えている。大人に交じって仕事ができるのは結構誇らしかった。浜の砂地の坂を上るのはきつい。それで三人ともユイムチをした。ユイムチというのは一定の距離進んでからそこで下ろし、戻ってまた運んでくるやり方である。戻りながら休むということである。父が寸法を取り、私たちはノミでほぞ穴を掘って建てた。

昭和三十四年、父は現在の家を新築した。平成五年、私が建て替えようとしたら、「襖、障子があるく家を壊すな。作るなら、土地はいくらでもあ

「るのだから別に作れ」
着があつたのだらう。
父は三回家を建てたことになる。
素直に偉かったと
思う。

ランプヌほや心

昭和二十五・六年の頃は、店の品物はまだまだすくなくあった。家で飴玉を作った。黒砂糖を鍋に入れて炊き、冷やして粘気のある間に庭の蜜柑の枝に引っ掛けて、縄状に引き伸ばして束ね、また引っ掛けて引き伸ばし束ねる作業を繰り返すと白くなってくる。それを短時間の内にして、色と粘りの頃合をみて直径一センチ程の太さの紐状にして、メリケン粉を敷いた板の上に置き、一センチ程ずつにはさみで切つて、粉をまぶして飴のできあがりである。それを大きなガラス瓶に入れて、伯母の森ナへ商店で売ってもらった。

捷三が小学校二年生の頃、その手伝いをした。私が中学生で一番上、その下が捷也で、三名でその作業をしていた。捷三が指を火傷して、痛い痛いと言いた。私と捷也は、枝に引っ掛けて練る作業の途中だったので、かまっておれないと思い、そのまま続けた。捷三の指に水ぶくれができた。その時、すぐ水で冷やす応急処置を知っていたら、自分がないまでも、捷三に指示してそうさせたのに。痛かったのだろ

う、しくしく泣き続けていたのになんにもしてやれなかったと、今でも心に残っている。それもあつて、火傷にもきくというアロエを今では庭の片隅に植えてある。

昭和三十三年に村営発電所ができ、それからぼちぼち電気が島内に普及した。カンテラとランプが夜の明かりだった。ウイヤー（おもちゃ）でカンテラをつけて兄弟で勉強していた。幼かった岩男があやまつてカンテラを倒した。石油が畳にこぼれてそれが燃えだした。油が燃えているとき水を掛けるとかえって広がるので水はいけなないと知っていた。砂を掛けるものとは知っていたが、砂がない。そのうち誰かが何かでばたばた打った。その時の私の家は、自家製の畳で、畳と畳の間が空いていた。さらにその下は板張ではなく、大きく隙間のある作りだった。床下にこぼれ落ちて土の上で燃えた。母はトーグラにいたが騒ぎを聞き付けて飛んできて、「ヌガラビンチャー」といつて、床をはがして着物か何かをかぶせてようやく消し止めた。

もっと大きく燃え上がるようだったら、たとえ燃えひろがろうとも最後の手段として水をぶっかけてやろうと思いつめていたので、その時の情景は今も強烈に残っている。その時父は名瀬勤務で不在だった

安堵感は並大抵のものではなかった。後年、母は何度も「あの時家が燃えていたら、『いない時に家焼いた』といわれるところだった、アッセ、ウワーシギサ」と言つては、今さっきあつたかのように胸なでおろしていた。

石油が燃えたさすがカンテラやランプのほやに着く。夕方になるとほやを拭いてきれいにするのは子供の役目だった。ランプをつけているとほやも熱せられて熱くなる。焼けていても焼けているようには見えず、透き通つた涼しい顔をしている。うっかり手を触れると火傷である。カンテラはその防止もかねてほやの外側を針金で囲つてあるが、ランプはそのままである。誰でも一度はその経験をしていると思う。

与論民謡に、「あきよ我が心、ランプほや心、内や焼かりていん、色や変らじ」と歌われるのは、この体験をしているから通じる。口説き落としての殺し文句である。アイ、ラブ、ユーとストレートには言わない日本人の感性であるし、精神文化である。

ランプが入つた当時は、「ランプのほや心」といわれたら、ぽーと心が赤く燃えただろうが、ランプとともに消え、今じゃ電気、「ビビッ」とくるそうである。恋も世につれでしようか。

ヤリバニ

徳里は、昭和二十三年から茶花小学校に務めていた。

ある日、飲んでいて警察の派出所の所長と些細なことからいさかいになった。徳里は、所長を道路下の浜にとって投げた。

翌日が大変である。兄の茂徳は、さっそくお詫びの品を用意し、徳里を連れてお詫びに行つた。所長が理解があり、幸いことなきを得た。徳里は鹿児島師範で柔道を専攻していた。若氣と酒が騒がせた。

徳里と徹は、ニイバイ（ハタ）釣りにいった。

枝珊瑚の間に黒褐色のうねうねと長い袋状の巣を作り、その中に住んでいるエビをとる、それを針に引つ掛けて釣るのである。エビはおおかたの魚の好物である。エビがもがき動きでもしようなものなら、どこからともなく魚が飛んできてかぶりつく。珊瑚のところに投げ入れたら、真っ先にニイバイが飛んで来て釣れる。

一匹が針に掛かり、もがくとその振動（波動）が周りの魚を刺激し、興奮して震源地

に注意を払う。二度目投げ入れると周りから我先に飛んでくる。最初は小さいのが来るが、二度・三度目からは一帯の親分格が来る。親分が来ると小物は引つ込む。それを釣り上げると二番手、三番手が釣れる。頃合をみて釣り手は場所移動をする。

釣った魚は、えら穴から口の方へ紐を通し、浮きをつけて禪の腰ひもにくくり、引いてあるく。魚はたいした傷も負っていないので生きてぴんぴんしている。ひらひら休みなくひれを動かし、五・六十匹にもなると壮観であった。多いときは百匹を越える。谷山さんと言う名人がいて、いつもひと尋をこえて、ニイバイをつらねていた。

ピューシという魚は大きく（一キログラム以上）なると、背びれがやぶれた形になって、ヤリバニと呼ばれ、さらに大きくなったのがナポレオンフィッシュである。

この魚は怪しいと思ったら、体を斜めにしてにらみつける姿勢をとる。私の前をヤリバニがやや斜めになりながら悠然と通り過ぎた。その先五十メートルほどのところに德里はいた。

ややあつて、德里の竿が弓なりになった。弓なりになりながらなかなかあがらなかった。徹は立ち上がりその様子を見つめた。竿は弓なりになりながら、右に左に揺れ、あがつたり下がったりである。

いまに糸が切れはしないかとひやひやである。德里は竿の根元を腹に押さえ付けて上げようと必死である。



そのうちようやく上がった。徳里はその魚を胸板に左手で押さえ付けた。ヤリバニだった。徹は、「ワーイ、ワーイ」と大声を上げた。その声で付近の人がこちらを見た。次の瞬間ヤリバにが跳ねて、バシャーと音を立てて落ちた。

徳里はあわてて水中に顔をつつ込み見回した。徹も駆け寄り周囲を見回した。そこにいるはずもないのに……。水中は静まり返り、徳里と徹の胸だけが高鳴っていた。徳里は、「イヒーン」とひと声発して苦笑いした。

ちなみに、出世魚で有名なのはボラ。幼魚はオボコ、やや成長してイナ、次はボラ、最後がトド。とどのつまりはこの魚からとか。

ミチャルムヌドウ トウユル

叔父の德里は、昭和二十六年に茶花小学校を辞め、新天地を求め、沖縄に渡った。米軍の下請け会社に通訳として入った。タイプのスペル一字が違っていてもすべて最初からやり直しさせる。小さなミスも許さない厳しいところだとこぼしていた。

德里は、車の運転免許試験の試験官もしていた。ある時、ちよつとした不注意で、道端の電柱にジープをぶっ付けた。あわてて人がみてないか見回した。幸い誰もいなかった。物損もジープの前がへこんだぐらいで、電柱もどうもなかった。試験官の名譽を思いあわてて立ち去った。

茂徳は、昭和二十七年琉球政府に転勤になった。那覇市に貸家が見つからなかった。与儀の郊外、米軍の石油タンクが座っている丘の麓の畑の一角を借りて、家を建てることにした。仮住まいだからといって、九尺二間の平木葺きのあばら屋である。金があるわけじゃないので、弟の德里と隣の地主の加勢を得て建てた。

やがて徹も行き、三人がそこで暮らした。

玄関のある家ではないので、靴は床下に置いていた。德里が新品雨靴を買ってきた。ある晩、床下で「ごそごそ」する音が聞こえた。德里は跳ね起き、雨戸を開けた。それより早く、何者かが逃げていった。

德里はちよつと追つ掛け、思い止まった。暗いし何をされるかわからないからである。腹いせに逃げた方向に石を投げた。雨靴は取られていた。盗人は昼間下見をしていたに違いなかった。

隣の地主の小父さんは、人のいい馬車引きだった。馬に鞍を掛け馬車を引かせて毎日出掛けていく。予定がないときは、那覇港に行く。

徹はときどき手伝いをした。米軍のジープやトラックが行き交う舗装道路の脇を、ことごと蹄の音を立てながら行く。方言以外話せない小父さんだったが、徹は横に座り、馬車に揺られながら、四方山話を聞いた。

地主の奥さんは、畑に花を作り、それを切って市場に持っていく、売っていた。花畑の面積は大きくなかったが、四季折々の花々をそれこそいろいろ咲かせて売っ

ていた。栽培種なので、はじめて見る花ばかりだった。焼け野が原の中から立ち上がる途上なのに、花を買うなんて？と思ったが、そこは米軍の将校の奥様方。軍需景氣にわく沖繩である。

奥様が、出掛けるので金を預かってくれないかと封筒を持って来られた。徹はそれを受けた。後で徹も、ちよつと出ようと思った。その金は、米を入れてある木箱の底に入れて、米でおおい隠して、錠を掛けて出た。錠といつても名ばかりのもので、木で作った外から箸などではね開けられる簡単なものだった。

徹は小一時間ばかりで帰ってきたが、その間に泥棒に入られていた。父の洋服やめぼしいものは取られていた。隣の奥さんの金を見た。お陰で無事だった。徹はちよつとだけ安堵した。

隣の奥さんが、青ざめて来て「私の金は？」と言った。徹は米箱の中から取り出して渡した。奥さんは「よかつた」とひと言いって、それを胸に抱いて帰った。徹は、どれほど父に叱られるだろうかと、父の帰りが恐かった。帰ってきた父に恐る恐る一部始終を話した。怒りは恐れていたほどではなかった。さっそく父は隣の

奥さんのところに行き、詫びた。奥さんはよほど肝を冷やしたらしく、自分が安堵したことだけ言つて、私どもの被害については一言も触れなかった。よほど大事だったんだらう。それまで取られていたらどんなになっていたらう。不幸中の幸いということか。茂徳が徹をそれほど叱り付けなかったのも、一つにはそれがあつたと思われる。それにしても、真昼というのに、泥棒の奴、堂々と担いでいったものだ。

泥棒の奴、かねてからねらいをつけ、動きを見ていたように思われる。

地主と徹の家は、民家の群がる集落とは林で仕切られて見通しのいい原っぱの中にあつた。前は農道が通つていて、時折農夫が通るだけの閑かなところである。当日も集落の林の中で、泥棒は、徹が出ていくのを見ていたに違いない。当時沖繩は、こそ泥が多いと聞かされていた。

スリ

徹は、船に乗るために泊港へ行つた。出港も間際で港は大勢の人でごつた返してゐた。徹は急いで切符を買つて、財布をズボンの後ポケットに突っ込み、両手に荷

物をぶら下げて、人込みをかき分けかき分け、乗船した。

船室でひと息ついて、ズボンのポケットから財布を出そうとしたらなかった。すられたのに全然気付かなかった。財布に60ドルほど入っていた。スリは切符売場で私の財布をみて付けてきたように思った。さもないければ、人込みの中で偶然見つけられるはずがない。

沖縄では3度も泥棒にあつた苦い思い出がある。与論の諺に「ミチャルムヌド
ウ トウユル（見た人が盗る）」とあるが、三度ともその感が深い。

デントーアイキ (電灯漁)

3、4個入りの水中電灯で夜の漁をするのをデントウアイキという。

男は海が好きだった。中学生の頃親の目を盗んで海にいった。髪の毛が茶色になるまで日がな一日海に浮いていても飽きなかった。モリで魚を突く漁が主だった。1・2級上の先輩や同級生と連れ立って海にいくのは何よりの楽しみだった。中でも西田秀吉兄は達人でいつも抜けて大漁をしていた。秀吉兄は、息も長く続かし、珊瑚の穴を丹念に見回り、感もするどかった。

ハターシ、ダフミ、サビチラ、アイナー、ニームシ、イヤービキ、ピユウシ、イラブチ、ヤシニヤ、ニーバイ、ユナジ、ナペーラ、イノーガマシ、アバシ、ババ、クワールユ、クチナギ、ウンナガ、アヒョウ、パマヒョウ、プウスク、タティグスク、プクルビ、チヌマル、スームチ、パフ、サジ、タフ、イビ、ヒラメ、ワン、等々獲物は多種多様だった。

瀬戸内町の池地にいた時、三月三日の「浜下り」の時に山を越えて、潮干狩りに連れて行ってもらった。そこには、アナグウ（シャコ貝）が瀬の上に干上がっていた。当地の人は取ったことないようで、取る人はいなかった。男は家族4人でむさ

ぼるように取った。持ちきれないぐらいで、小学生の娘にも分担させて山を上って帰った。当地の人は取り方を知らないのか、それともそれよりうまいのがあるからか、はたまた取るのが面倒くさいからか、食べたことがないという。与論では珍重しているのに、男にはいとも不思議に思えた。

薩川湾の内海にも多かった。やはり地元の人を取らなかつた。こちらは潜って取った。沖縄から嫁入りして来た方がいて、その人の親戚が沖縄から来て取って行く話を聞いた。その人たちは、特殊な道具で中身だけえぐり取っていくという話だった。そのアイディアいいなと思ひ、男も試みたがうまくいかなかつた。特許ものに近いのだろう。内海は栄養が豊富だから、大きいのが多く取れた。ヒレシヤコで、貝殻の差し渡し30センチ程のものも取った。ヒレシヤコ貝は、珊瑚の石にしつかりとくつつき、ちつとやそつとでは取れないものと思つてなかつたが、なんと砂の上には、外套膜を広げ悠然と座っているではないか。男は、我と我が目を疑った。潜って持ち上げるとそのままとれた。大物で見えるのも初めてとあつて、50を過ぎた男の胸は高鳴った。胸の高鳴は続き、それで打ち切り一目散に家へ帰った。その経験話を話したら、ある老漁師が、自分の体重で波にゆれなくなると石を離れ、泳いで移動をするといった。また一つ不思議発見である。その後ほぼ同じ大きさのもの3

個取った。マベ貝など違う種類でかつて取ったことのない大物が取れた。瀬戸内の海は豊かだった。

男は、与論にいたるときにデントウアイキをした。満天の夏の夜に素潜りである。水を掻くと夜光虫が青白い光を放つ。足で蹴った後には気味悪いほどの光が乱舞する。夜の海は魚たちも眠り静寂である。イラブチ（青ぶだい）は、水中電灯で照らすと鮮やかな青色を浮き出し、自分が眠る穴の付近は自分が出した薄い透明な粘膜で覆い、身じろぎもせずに眠りこけている。それをモリでぶつすと突く。すごい力でモリをがたがた、ぶるぶる震わせる。男は逃がすまいモリを押さえる。砂を巻き上げるから見えない。動きが落ちたところで、モリの根元へ引き寄せて浮上する。イラブチは柔らかいために、腹の辺りを突くと欠けて内蔵を出しながら逃げていく。取り逃がしたかどうかは、モリの振動具合で見なくてもわかる。

男は、名瀬にいたとき、笠利の節田や和野に、そこに住んでいる郷里の先輩を頼って、デントウアイキに行った。波の穏やかな夜であった。外海に通ずる20¹4²方ほどの壺状の底に、コウイカが動かずにいた。かなりな大物だった。男はしめたと、モリのゴムを引き絞り、息を大きく吸い込み潜った。コウイカは背中堅い甲羅があり、モリを通さないのので、頭の部分か、横から突く。頭は突き外すおそれが

あると横から突いた。突いた瞬間衝撃が走りモリは多きくゆさぶられた。男は、逃がすまいとモリの根元にイカが来るように突き進みながら、早く抱え込もうとしたが思うに任せない。押さえ込もうとモリを握る手に力を入れるが、相手が強い。イカが出した黒墨が立ち込め、辺りは一寸先も見えなくなる。とうとう振り切られた。男は、息切れと絶望とともに浮上した。

男は、やや放心状態になり、石の上に立った。50メートル程離れた先輩に、「フブシミを取り逃がした」と言った。先輩が寄ってきて、黒墨の広がり様を見て、「大物だったね」と言った。男はあきらめ切れずに、黒墨が消えるのを待ち、もしや、もしや、であたりを見回る未練だった。

名瀬から笠利の空港までは、当時車で一時間もかかった。男は、潮時のいい祝祭日には、笠利の節田付近の海に、素潜り漁に行った。タコが岩穴に頭を下に逆さに張りついていた。モリで突き、抜けないようにさらに深く突き抜かしてからひっぱった。強く引つ張り出せなかった。先にガギの付いたモリだったので逃げられることはないと思って、息継ぎに浮上した。大きく息を吸って潜ったらだんだん奥へ引き込まれていた。力一杯引つ張ったが駄目だった。モリが弓なりになってきた。先にガギが付いているものだから抜けもしない。息が切れた。再度潜って、もうあ

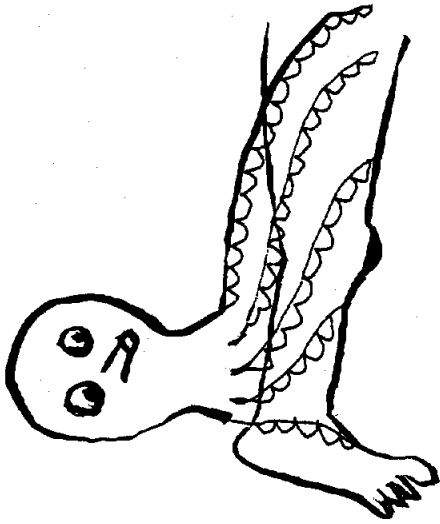
きらめモリだけでも取ろうと思つて試みたが駄目だった。とうとう柄の竹が割れて、柄だけが取り柄となつた。タコは突いたらすぐ引つ張りださないとだんだん吸いく力が強くなることを知つていたのに、一回目ですぐ突いたり引いたりして引つ張り出せばよかつたと後悔した。こちらは油断し、向こうに準備期間を与えたのが敗因だった。男は、あのタコの今後を思いながら、長い帰り道をたどつた。

男は道々、幼い頃の話进行い出した。A兄とB兄が、シナパ沖で長ヲウイ（柄が4呎以上ある銚）を使った素潜り漁をしていた。Aは、Bが「タコがいる」というのを聞いた。ややあつて、Bがいつこうに海面に浮いてこないのをいぶかり、Bのところへ行つた。すると、Bは片足をタコの手に絡まれ、仮死状態になつていた。Aは素早くタコの手を引きはがし、Bをリーフの上に担ぎ上げて、水を吐かせて蘇生させた。Bを落ち着かせた後、Aは返つていつて、そのタコをあげた。Bは片足が不自由で利き足の方を捕まれた結果だった。タコは勿論大ダコだった。しばらくはその話で持ちきりだった。まだ腕に残る先ほどのタコの力は男をタイムスリップさせた。

男は、空港付近の海になれてきた。潮時が合うとデントウアイキの誘惑に勝てず、

一人で行った。上弦を過ぎた日だった。和野の海に入ったら、すぐに50呎以上も伸びた海藻の林というか森というかに出くわした。寄せては返す波に身をゆだね、ゆっくりと揺れていた。目を凝らすと、同じ茶褐色だが揺れが同じでないのが見えた。なんと、コウイカが70度ぐらいの角度で斜め立ちし、8本の手と二本の脚は腹側に直角に折った形をしていた。男は思わず息を飲んだ。幸運の神様に感謝し、難なくあげた。

あの豊かな海は、今もそのままだろうか。老齡期に入った男は 年とともに、懐かしさも深まっていく。



ウヤマサイ（親勝り）

私の祖父竹下宮里は、竹下ナへと西田徳里の間に、竹下ナへの私生児として生まれた。十六歳のとき、徳里の妻マツが、「城に子供がおるそうではないか。連れてきなさい」といつて那間に引き取られて育てられた。後に、徳田ウトと結婚し、わずかばかりの土地をいただき、アダニウジンヤー（アダン柱の根元を埋めた掘つ立て小屋）を建て新婚生活を始めた。

徳里翁が土地を分け与えるとき、宮里の継母マツが「あれだけの土地では芋を作つて食べる分もないではないか」といつて加増させたという。そんな中から五反あまりの田畑を求め、茂徳、茂義を師範学校を出し、徳沢を海軍学校、ヨシを看護婦学校にさらには徳里を師範学校を出した。どうやって仕送りをしたのだろうか。今のようになかった。私には考えられない世の中ではなかったし、簡単に稼げる時代でもなかった。

れないことである。いかほど苦勞しただろうか。

親戚のある人が酒によつて家の側を通るときには決まつて大声で「継子の子ドウデイクユイ」と言つて通つたと母が言つていた。これにはいろんな意味があるように思われる。

父茂徳は、鹿児島師範学校在学中に、肋膜から結核を患い、やむなく中退した。その時の担任の先生坂口徳太郎教授が、「病氣を治してからでも教員免許は取れるから」とおっしゃったが、茂徳がなおも頑張ろうとしたら、「そんなにしたら死ぬぞ、帰省して療養しなさい」と厳命なされた。その時の肺の空洞は生涯レントゲンに映り、定期検診の度に引つ掛かり精密検査を強いられた。そのため常に些かの不安を抱いていたのだらう、八十歳を過ぎた晩年に、医者からもう大丈夫といわれたときは疫病神から解き放たれたように喜びいっぱいを日記に綴つてあつた。父はきやしゃではあつたが、これといった大きな病氣をすることもなかった。死んだときも病ではなく老衰だった。一病息災といわれるよう

に、結核の痕跡を背負っていたから生涯無茶せず、健康で92歳の長寿を全うできたんだと思う。

父が那間小学校の若い教員の頃、オルガンが送られてきた。その荷ほどきをするやいなや唱歌を弾いた、それを見た益田元甫少年は感動し、憧れ、後に音楽の道に進むようになったという。戦後立長の叶生秀さんの松木山から松を切り出して茶花小学校や中学校の校舎を造ったり、まめに働いた。校長退職後も「負けてたまるか」の気概を持ち、土地を一町歩ほども買入れ、牛も飼ってよく働いた。戦中戦後の中で8名の子供を産み育てた。ひとは私に「君には父は越えられない」とよくいわれた。若い頃はそれを快く思わず、劣等感を抱いたりしたが、今は素直にしゃつぽを脱ぐ気持ちである。

曾祖母、祖父、父と歌は皆上手だったが、私は音痴だと小学校のときに先生に烙印を押された。祖父母を徳沢、ヨシ子、トヨがついて大阪・東京の見物旅行をさせたときに、祖父に、わざわざ歌をレコードに吹

き込ませてあつた。

曾祖父の西田徳里は、車大工だつた。砂糖黍を絞る車は、その頃は鉄以前の木車だつた。使っているうちに磨耗してすり減り、絞れなくなるので、削つて歯車を合わせていくのである。その名工だつたので島内はもちろん、沖永良部まで渡つた。島内とはいつても今みたいな道もなく、何週間も泊まり込みで続けた。沖永良部は半年あるいはそれ以上滞在したのでしよう。その間、徳里は正直でよく働き、「ユンヌの正ドウラ

（与論の正直者のトラ、一種の愛称）」とみんなに親しまれた。沖永良部滞在中にソテツの雄花を雌花に入れる技術を習いそれを与論に普及させ、ソテツ実の収穫を格段と上げた産業功労がある。そこで前後二人の女性にまみえ、二人の子供をもうけた。子供は、内に7名、外に4名、計十一名の子供をもうけた。

徳里は、妻にしたいと思つてゐる本マツを連れてきて、他人の土地に向かつて思いつきり石を投げて、あそこまで私の土地だと、だまして娶

った。しかし、その後働きに働き4町歩もの土地を買い、琉球赤瓦で當時としては豪壮な家を建てた。「那間の瓦家」といえば西田徳里の家を指し、分銀者（金持ち）と名を馳せていた。女の子たちもそれぞれ名家に嫁がせていたので、徳里家で祝祭事がある時は豪勢だった。その中にあつて私の祖父は継子であるし貧乏なので末席に小さくなつて座つていたと父が述懐していた。

徳里の妻マツ、つまり祖父の継母は慈母そのもので祭事するとき、他の子供たちは土地もたくさんもらつているから当然だが、あんたはそんなにする必要はない」といつて持参するものを軽くしてくれた。薪も黙つて取つていつていいよと何かと優しくしてくれた。官里一家は、マツお婆さんを中心に記念写真を撮つてある。

私はどうてい父を越えることはできない。父も祖父を越えていない。祖父も曾祖父を越えていない。生き方において親を越えた人は偉大だと思う。

「親勝り」は最高の褒め言葉のように思う。私は子供がその年代・時点で親を越えてくれることを希求して止まない。

先祖の後をたどると、敬服、感服の極みである。よそ様からみると鼻持ちならないかもしれないが、素直にそう思う。人は死んで何が残せるか。少なくともその生き方は残る。今からでも「少しでも誇れる生き方」を残したいものである。

ドウダンミン男の自慢高慢チキをお笑いいただければ結構結構。

宿元と家元

与論の葬式では「サイアタイ（酒担当）」といって、盃に酒を注ぎ、「サーギ」、もしくは「なさき」といつて参拝者にすすめる。当今は酒氣帯び運転を配慮して形式的になりつつあるが、以前は結構みんな飲んでいた。

その時の一升瓶には、「宿元」と書いて貼つてある家と「家元」の二通りがある。どんな違いがあるのだろうか、どちらが適切だろうか、喪家では特に気にしている様子もないが、男はいささか気になる。

仏教では、六道輪廻の考え方がある。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の六道を生まれかわり死にかわりするという。この世は、この生まれかわり死にかわりしていく旅路の宿という考え方にたつて宿元にしたのであるか。宿世、宿因、宿縁、宿業等仏教用語に「宿」がある。

「家元」を辞典で引いたら次のようにでていた。生まれた家。実家。芸道などで正統を伝えているその流派の本家、また、その地位にある人。宗家。神道では、祖先を崇拜し、一家、家族、「家」をもとにする。墓碑に、○○家の墓、○○家累代の墓と記名されている。墓での本人のお家としてガンブタは家の縮小形である。

○○家と○○家の結婚式と大書する。

「家」觀念がもとなつてゐる（宿という觀念はない）ことから、男は「家元」が適切ではなからうかと思う。

宗教觀だけではなく、葬祭、生活觀念には神道が主だとはいへ、仏教思想も色濃い。子供の頃によくいい聞かされた「悪いことをすると死んだら地獄へ行かされる」など。因果応報、善因善果、惡因惡果、因縁、多生の縁。

葬祭など神仏混淆で行なわれている。というより氣にするとところがない。そのため「宿元」「家元」どちらでもよいのだろう。

しかし、ある神官が、「与論の人は、人が死ぬとすぐ『神ナテイ』といつてゐるが、死んで四十九日は幽界をさまよい、その後分厚い門をくぐり、下界にいき、三十三年たつて昇天し「神」になるのであつて、死んだらすぐに「神」になるわけではない。」と語氣強く語つた。弔慰を表すために何氣なく遣つてゐる言葉もおろそかにできないものだ、と、不勉強を男は恥じた。

与論の人は、あと二三日の命というときには、病院から自宅に連れてきて家族・親族に見守られながらあの世に旅立つ。これはよい風習に思える。

最期は自分の家でむかえ、肉親に送りたいという強い願望がある。

祖先崇拜が強く、毎朝お初を捧げ、ことあるごとに神棚の前にひざまづき拝む。

他界しても常に共にある感じで暮らしている。

パナウル診療所の古川医師は、与論島を「魂の島」と褒め称え、次のように作詞している。

魂の島

一 はるか日本の南に 魂の住む島があるという
美しい海と珊瑚に 包まれた島だという
そこに行けば 懐かしい人に 会えるという
はるか南の島は 魂の島だという

(二番、三番略)

四 誰もがみんな自分の家で死ねる 島があるという
家族に守られて 魂の先立つ島だという
そこに行けば 誰もが命 永く生きるという
はるか南の島は 幸せの島だという

与論島かヨロン島か

与論島（じま）かヨロン島（とう）か。

名は体を表すだけに、なおざりにできないように思えてならない。

ヨロン島（とう）が呼びならわされ、観光パンフレットにも載せられて宣伝されている。平成元年の頃、NHKのラジオでアナウンサーが、「よろんとう」は実際は「よろんじま」が正しいんだそうですね、と言っているのを聞いてはっとさせられた。

南大東島、与那国島、竹富島、伊平屋島、喜界島、屋久島、佐渡島のように国内の島は「しま、じま」と呼び、表記している。グワム島、ジャワ島サイパン島、スマトラ島、マダガスカル島等のように外国の島は「とう」と呼びならわし、カタカナ表記にしている。

「ヨロン島」とした当時の観光課長の趣旨説明によると、カタカナ表記で異国風にしたい、「とう」とよんで大きな島に思わせたいからとのことだった。宣伝効果を上げたい気持ちにはわかるが、いささかごまかしがある。

「まことうちじゃしより」と歌いついできた古来の心、「誠の島」を島是と

してきているだけに余計いかななものかと思う。

事実、ヨロン島は外国と思つていた、ともらす観光客もいた。

小・中・高校生が「ヨロン島」と言い、それが正しいと思つているとすれば問題である。「ヨロン島」はあくまでも観光宣伝のためのものであつて、「与論」と言う「島」、「与論島（じま）」が本名なのだというのを踏まえていて遣つてもらいたいと私は思う。

日本の国名は「日本」である。ローマ字表記にするなら「NIPPON」である。欧米人が日本の国をさして「JAPANジャパン」といった。日本国内のことであつても、これの頭文字の「J」を取つたものの多いこと。

JR（国鉄）、JT（日本タバコ）、JA（農協）、JAC（日本エヤーコミューター）等々。タバコの名前にいたつては、マイルドセブン、キャスター、キャビン、テンダー等々。それがまた偉そうに英語で書いてある。読めないと思つこぼす人もいる。どこの国の人に売ろうとするものだろうか。自国を卑下し、西欧かぶれの多いこと。

与論島は島だからよい。小さいから大きな海がある。どこへでも十分で行けるから便利。近いから協力し合える。島を長所・特性とした発想をし、誇りをもつて生きたいと思う。

「与論島慕情」では明確に「じま」と歌っている。「しま」だから旅情がわく。

ユリ又浜か 百合が浜か

潮が引くと大金久海岸の沖合に白い砂浜があらわれる。芸術的な波模様を浮き立たせた清らかな砂浜で、与論の観光スポットである。

この砂浜（砂州）は、日々形を変える。砂が寄り集まって形づくられるから、波や潮の流れによつて変わるのである。台風の後など形も場所もすっかり変わることがある。出る砂浜の数も年によつて異なる。昔の人は、出る砂浜の数によつてその年の吉・凶を占ったという。

砂が寄り集まってできる浜。あつちよりこつちよりする浜ということ、寄りの浜、すなわち与論語で「ユリ浜」、または「ユリ又浜」と呼ばれた。近年「百合が浜」と表示してある。「ユリ」に植物の「百合」をあてて「百合が浜」としたと思う。百合の花の白さと砂浜の白さをダブらせて、観光客受けをねらったものだと思う。私がそう話したら、五十歳代のある識者が、「海の中に百合の花がぱつと咲いたような浜だから「百合が浜」と命名されたという説がある」と、得意げに反論してきた。それはまた珍説、突拍子もない話だ、そこまで毒されたのかとドウダンミン男は思った。

砂が寄る、波が寄る 魚が寄る、人がよる、観光客が寄る、だから「より浜」なのだ

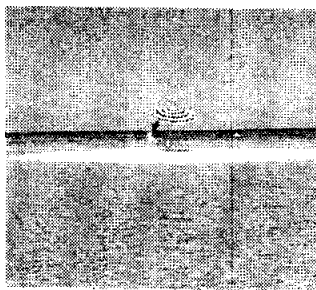
と宣伝しないのか。それがオリジナルで観光客受けもするとドウダンミンする。

漢字表示をするためにイメージの違うものを当て、地名も時代とともに風化していくのかなと思う。ウワアチは島の北になるので上地だったと思われるが「宇勝」になっている。うかつだ。永良部は、北側は国頭、反対の南側は島尻とした。これは北は上として、船も飛行機も皇居に向かうのを「上り」としているところからきている。知名の住吉は「島尻」だったが「尻」がイメージ悪いとして近年「住吉」と改名した。沖縄は今も国頭、島尻としている。

地名にも意味があり歴史がある。

地名は貴重な文化遺産である。

おろそかにしてはいけないと思う。



「正月ニゲー」と「八月ウガン」

正月ニゲーは、主に漁獲に行き死亡した霊の祭りであるが、地上での変死者の場合もある。

八月ウガンは、大工、鍛冶屋、ノロ、ヤブ等を仕事としていた霊の祭りである。

正月ニゲー・八月ニゲーの「ニゲー」は「願い」である。この呼び方を、「ニゲ」「ウガン」、「トオトウ」と人によつてまちまち、ごちゃまぜに遣つてゐる。勿論意味を意識してはつきり遣い分けてゐる人もゐる。

私の本家の西田家では、両方行なわれてゐる。呼び方は、正月ニゲー、八月トオトウといつてゐる。拝みに集まるのは、正月ニゲーは男系だけで、八月トオトウは女系も加わる。その時の持参品は、米二合にスウマシの茶碗二つ、焼酎二合ビン二本、お金千円。八月トオトウの女系の持参は、お金千円に、あとは男の半分と決めたようだ。

西田家の正月ニゲーは、何代前の誰が海でなくなつたのか、当主もわからずに祭つてゐる。おそらく祟りを恐れて続けてきたのであろう。祭りが正月元旦の午前中に行なわれるので、公的行事とも重なる関係もあつて、私の代も引き続き拝むのはお断わりした。祭りが、なぜ正月元旦なのかというと、その日だけ海底の極楽浄土の神さまに願い出て子孫のところに戻る。この「願い」出ることからニゲーと先祖

から聞いているという人がいる。八月ウガンは、車大工をした德里翁の祭りなので、誇りであり、むしろ積極的に拝まねばと思っている。

この祭りに参加する人は、キエー（禁忌）をしてあらかじめ身を清めなければならぬとされている。以前は一カ月とされていたが、今は十日、七日と短縮されている。与論十五夜踊りの踊り子達は、特に守っておられる。これは汚れた身では、神様の前に出られないという慎重さからだと思う。

八月ウガンは、私の曾祖母がノロだったために家でも拝んでいるが、祖父が「私だけでいい」といって、他から拝みにくる人はいない。一度拝むと代々続けなければならぬといわれ、持ち帰ったものを食べても拝まなければならぬとさえいわれたようでもあるが、いまではまちまちだし、さほどきびしくも思っていない。

私の曾祖父も曾祖母も揃って八月ウガンの神様である。

与論町誌に、正月ニゲー、八月ニゲーと両方とも「ニゲー」にしてある。これはこの祭りで唱える言葉に霊の冥福を願う言葉がこめられているからとしている。その祝詞の一例として次のように記されている。

ヒットートウ

いまここに あなたのクワ（子）、ウマガ（孫） みな
あらたまつて集まつて そろつて

海山の品々 初穂 初物 供えて ヒットートウ

チュラフガン しやびゅーし ヒットートウ

内 外の子 子孫に タタイグトウ チカイグトウ
あらしめて くださらないように

ヒットートウ

島のあるナゲー（間） ジイ（大地）のあるナゲー
元氣にあらしめてくださつて ヒットートウ

チクイムジクイ（作物） 島ぬユガプー（世が富）

アラチタベンシヨウチ 美しく拝まれ

美しく願われて タバーリ（賜れ） ヒットートウ

しかし、両方とも同じ「ニゲー」と呼ぶのはいささか疑問に思う。
正月ニゲーは、畳みの上で死ねなかつた怨念があり荒神である。そのため子や孫

が漁に出たとき、取りついて崇らないように乞い願うから「ニゲー」である。渚に打ち上げられる寄り木等には、この霊が取りついていると恐れられている。

八月の祭りの対象となる大工・鍛冶屋は特別な技術の持ち主であり、ノロは司祭者で、ヤブは神託を受けて告げる占い師であった。したがって一般人と異なり、畏敬の念をもつて祭られる。だから八月ウガン（拝み）が適切だと思う。

与論町誌では、両方とも祝詞が似通っているからとしているが、原初の頃は異なっていたと思う。それがだんだん似るようになり、今では一般的なトオトウでも似たような文句が唱えられている。

正月トオトウ、八月トオトウという人もいるが、トオトウは通称名詞で、この二つは特別にキエーをして特別な日に行なうので、固有名詞で呼ぶのがよいと思う。
正月ニゲー、八月ウガンが正しいと男はドウダンミンする。



今年（平成十六年）のNHKの大河ドラマは、新選組である。新選組の旗文字が、「誠」である。

与論島の島是、与論中学校の校訓が、「誠」である。山市郎校長が、与論中学校長に就任して、与論民謡の歌詞「打ちじゃしより、じゃしより、まこと打ちじゃしより、まこと打ちじゃしより、ぬ恥かちゅんが」から取り、「誠」を校訓とした。その後、町民憲章の中に、先人の遺訓として「誠」が取り入れられたりして「誠の島、与論島」と呼ばれるようになった。

山校長は、生徒たちの自己主張の弱さを憂い、大都市や国際社会で生きていくには、この「誠打ち出せばぬ恥かちゅんが」という気概と積極性が求められる。また、郷土の先人が生きてきた道標でもあることから誇りにし、郷土愛を高めるためにこれを打ち出された。

ある日の全校集会で、「昔は次男坊以下は、親から禪一本もらって海に漕ぎだして生きた海洋民族でもある。日本はおろか世界をまたにかけて活躍する勇猛心を持って励め」と気迫に満ちた訓示をされていた。

「誠」は、「言ったことは成す」、「成したことは胸張って言う」、「言

と「成」が不離一体なものである。与論の諺に「マクトウヤ 天トウユン（至誠通天）」というのがある。誠なことを言動に表して何を恥じる
ことがあるか。堂々とやれと叱咤激励している。裏を返すとそれをして
ない島民性があるからなのである。

青少年の非行がでたり、観光が盛んな頃、えげつない客引きや物売り
をしたり、何百万円の工事をさせて費用を踏み倒したりするのをとらえ
て、与論に本当に誠はあるのかと不快感をあらわにする人がいた。与論
の誠は「言われるままに成す誠ではないか」という蔑んだ言い方をする
島外者さえいた。「言われるまま、成すがまま」といわれるとさすがに
むつとする。

誠は天の道なり

これを誠成らしむるは

人の道なり

誠はそこにあるのではなく、人が行なって初めてそこにあるのである。
物が豊かでなかった昔は確かに多かったに違いない、物や金に反比例し
て薄れてきた感は否めない。それでもまだ相対的に多いと信じている。

「与論島は東洋の海に浮かぶ一個の真珠である。その心は、誠。」をキヤッチフレーズに、NHKの新選組の「誠」を追い風として与論観光が順風満帆といかないものかと男は夢みる。

(平成十六年正月)

誠一筋

誠一筋

これぞ汝の胸飾り

心の底の奥に止め

世の中いかに荒れるとも

欲の誘惑あろうとも

世を去るまでの旗印

いそがず 休まず

誠一筋

ユンヌ魂

沖永良部島との合併について、賛成か反対かの住民投票が平成十五年十一月三十日にあった。投票資格者は、高校一年生以上で三カ月以上在住する全住民。投票総数は4084票。投票率は83.47%。賛成535票(13%)、反対3549票(86%)、無効51票。

男は、与論の良識万歳、与論の未来万歳、与論魂万歳、与論愛万歳、独立自決の気概万歳を心の中で叫び、興奮し、えも言われぬ「ほこらしや」をおぼえた。これぞ与論魂、不屈の気概、たぎる与論の血潮である。

今年は、あたかも奄美の日本復帰50周年である。50年前、異民族支配から抜ける気概、民族自決の意気に燃えたのと似た様相を感じた。

男は開票直前まで、投票率、反対票がどれだけになるかが、ことのほか心配でならなかった。その理由は、

- ・ 島の歴史が始まって以来の大問題でしかも与論の運命を決定する重大問題なのに住民の関心が低い。
- ・ 為政者の姿勢がわからない。

・ 合併法定協議会に入り、だんだんと合併の方向に引かれていつている。

・ 高校1年生から投票権を与えてあるが、果たしてどの程度理解して投票するだろうか。

・ 投票率50%未満のときは無効として開票しない等々。

開票結果は、予想をはるかに超えるもので驚喜雀躍した。会う人、聞く人ごとに「驚き、喜び」を発していた。中には賛成票の535の人々はどんな人だろうかとか、もつと賛成票があると思っていたとかの声があつた。かく申すドウダンミン男も票差はあまりないのではないかと危惧していた。識者と思われる町会議員の中にも賛成表明をしているもの、はつきりしないのもいたからである。

投票5日前には、大田英勝、喜村政吉、喜山康三、徳田隆男、永井峯勝、野口靖夫、福地元一郎、本畑敏雄の8名の議員は反対の意思表示をチラシにして配つた。これに対する賛意、反発、さまざまであつた。名前を連ねてないのは賛成議員だと決め付けるもの、「どうしてだろう」と疑問を呈するもの、あんなことをやるからあの方々に反発したくなる、これだけの大きな難局に議員は一致して当たらないのだろうか等等あつた。島の命運を決める大事な時だけにはつきり意思表示したのは、評判がよかった。島疑問視していた高校生が、圧倒的に反対傾向にあつたのは、感心させられ島の将来に安心感と若者ほどしつかりしているという爽やかさを与えた。

鹿児島県が、与論・沖永良部の合併枠組を平成13年発表して以来、合併研究協議会を立ち上げ、鹿児島総合研究所にシュミレーションを依頼して作らせ、それをもとに砂美地来館で県の合併対策室長及び職員、総研の職員、町長及び職員などが説明をし、質疑応答、意見が出された。町民の反応は、合併した場合、しなかった場合の姿が見えない、海を越えての合併は反対であるというのが大半だった。

町当局が各集落を回って説明した。合併しなかった場合のシュミレーションを示してくれという要望を男はした。那間集落では反対の空気が強く、賛成意見はなかった。

町民アンケートがあった。回収率73%で、賛成15%、反対55%、残りはどちらとも言えない、わからないであった。

15年の5月、砂美地来館で2度目の説明会があった。合併しなかった場合の町独自のシュミレーションが出されたが、ざっとしたもので、もっと突っ込んでシビアなものを期待していただけに、男は物足りなさを感じた。

町民の空気は反対が大多数であると感じ取った。町長は、国の地方制度調査会の最終答申が出ていないし、その結果や合併協議会の案が出てから判断したい、今は判断できないので、法定協議会まで参加させて様子を見させてくれ、最終的判断は住民投票に掛ける。それは必ず約束すると語気強く言った。町民は、「法定協議会に参加しない」の意向が強く、住民アンケートで反対が明らかに過半数を超えているのに、なぜ参加しようと

いうのかという強い意見も出たが、町長に押し切られたかたちで終わった。

議会は合併反対者が多いので、合併協への参加は否決されるものと思っていたが、あにはからんや10対5ですんなり参加となった。男はあきれ不甲斐なく思った。

住民投票条例を設置した。

国の地方制度調査会の最終答申案が出、沖永良部との法定合併協の「新町まちづくり素案」も出た。町独自で作った「単独でいく場合の案」も携えて十一月三十日の住民投票に向けて、3校区を回って説明した。どの校区でも賛成意見は出なかったという。

男は、十一月十九日那間小学校体育館で説明会があったときに次のような意見を述べた。

・ 国が合併を進めているのは、市町村の数を減らすと交付税が少なくて済むからである。逆に合併をするともらいが少なくなることになる。

・ 県は、合併の大合掌の中で、与論は隣に町村がないために、海を越えて沖永良部にくつつけようとしている。喜界島も同じ。

・ 合併後どうなるかは歴史を見ればわかる。瀬戸内町の加計呂麻がその例

・ 合併したときの議員の定数は26名。与論からとおるのが6名とすると、議決は、

20対6。ウイビヤ ウチカチドウ マガユル。

・ 与論を「ユンヌヴラー」という。

・ 合併問題は、財政も大事だが、財政や金に換えられないものがある。

ある識者が最後に立って、「ユンヌヴラーになつたらいけないから、みんな反対に投票しましょう」と全体に訴えた。

住民審判の日。十一月三十日。男は投票一番乗りをしようと思い、開始きつかり7時に投票所の体育館の玄関に立った。ところがすでに先着5名がいた。男は投票率が氣になつて仕方がなかつた。数日前から当日の天候を氣に掛けた。折から大型台風21号があり、その進路が氣になつた。お陰でそれだ。天候はよいとは言えなかつたが、出足にかかわるほどではなかつた。前日までの不在者投票は、好調だと聞いていた。

男は、校門から出てくる人に「何番だったか」と1時間おきにきいた。

喜山康三さんが十一時過ぎに回つてきて、50%は超えたと教えてくれた。町内無線放送でも発表があつた。50%の第一ハードルはクリアした。

投票率が上がれば、反対が多いに決まっている、と人々が言つたし、男もそう確信していた。後は何%まで上がるだろうかである。午後8時から開票。選挙管理委員会から投票率83・47%の正式発表があつた。「反対勝利、間違いなし」男は小躍りした。

正式発表を待ち切れずに、同志の先輩を招いて酒盛りを始めた。

昨年来やきもきしてきたのは一体何だったのか。法定協議会に参加したのがそもそも

のつまづきの始まり。今まで費やした1千万超の予算、人的エネルギー、沖永良部への迷惑。酒が入るに従い、愚痴がボンボン出る。

任意合併研究協議会のときにとった住民アンケート結果は、賛成15%、反対55%、どちらとも言えない・わからないが30%であった。その後法定協議会に入り研究、情報收拾、説明等後の住民投票の結果は、「どちらとも言えない・わからないの30%」は、そっくり反対になったことになる。賛成者は、15%から13%に逆に減った。

今回の住民投票の結果の数字は、与論島民の気概を示すもので、島を愛する熱き血潮の吹き出しと敬服の一語である。各種の議員選挙や首長選挙は、熱烈な運動員がいて頼み込むのだが今回はそんなことはないのに、自分で歩ける人はほとんど投票したことになる。

86%の反対票は、自立、自律、自決の意思を天下に示した。苦しくとも分け合い、手をつなぎ、しのいでいこうという誓いでもある。与論島民性はおとなしいといわれていたものを覆す反骨の気骨を示した。「ウイカティヤー ミジャー パヤサランヌ」ではなく、「マクトウ ウチジャシヨリ・・・」だった。

男は、投票日が近づくに従い、あせりがつのり、会う人ごとに、「私は、永良部との合併は反対だが、よろしければ反対をお願いします」と言った。「私からお願いだ」、「私も反対だ」、「賛成する人も居るだろうか」、等々反対の意向だった。町当局に、投票率を

あげるような努力をしてください、と頼みもした。島のこの難局（独断？）に何もしいのは、子孫に恥ずかしいことだと思つて。お願いした方々に投票の翌日お礼も申し上げた。

川村武俊は、「与論がなくなる」、「与論の生活を永良部が決める」等の立て看板を各所に掲げ、宣伝カーで反対を呼び掛けた。

喜山康三も、宣伝カーで何回となく、隅なく呼び掛けて回った。
ご両名の尽力に感謝を申し上げた。

意気軒高とした「ユンヌ魂」は揺るぎないことを発した。やる気と知恵と汗を出し、手を携えて島を榮えさせ、「パイヤ トウテイヤー ヌマラジ」と島外の人からいわれ、誠の花が咲き香る島にしていきたいものです。

後塵をかぶり涙流すより、汗流し胸張る方がいい。

ウシク、ガジマルヤ 石抱ちドウパセル

子や孫抱チパセル 長者のウプスウ

子や孫のためにあえて記した。（平成十五年十二月二日）

辛抱を心棒に

子供の頃、木を削ってクール（駒）を作った。心棒には鉄釘を打ち込んでその先を砥石で丸くして仕上げた。心棒を中心にバランスがとれているかいないかが、こまの命であつた。

今、飽食の時代、ご飯を残して平気で捨てる。私の中学生の頃はどの家でも米を作っていて、その手伝いをした。ソテツの葉を切って田圃に入れ、牛に石引きを引かし、フナシ（どろどろにこねること）ながらそれを踏み込んでいった。足に刺さって痛かった。寒いときの作業なので、足の皮膚は縮む。しわの間に、赤土の細かい粒子が入り込むので、洗ってもなかなか落ちない。布団に入り暖まると炎症で熱を持ち何ともいやな気持ちになる。翌日は、小さなひび割れがたくさんできて血がにじみ出た。その足でまた田圃に入って作業をしなければならなかった。そんな体験をした人は、決してご飯を粗末にしない。「ご飯粒を少しでも残したら罰があたる」と厳しく叱られた。

大相撲の相撲取りは800人いるそうだが、その中で横綱は2・3人である。序の口あたりは、朝の3時、4時に起きて練習をする。横綱は9時ごろ起きてきて、土俵を占拠し、したい相手を自由に選んで、自分のしたいだけする。食事をするときも一番先で、

幕下以下の力士が作ったちゃんこをおいしいものから食べたいだけ食べる。序の口は一番最後である。最後になると汁だけになることもあるという。それをご飯にかけて食べる。そんな辛い思いをしながら、それでも耐えて練習を積み、出世していく。力士にサインを頼むと、よく「忍」という字を書く。忍の一字を心に刻み込んでいるからだろう。忍という字は、心の上に刃を置いてじつと耐えることを意味している。子供を駄目にしたければ、子供が欲しがるものを自由に与え、要求どおりにして育てることだといわれている。食べたい、買いたいものがあっても我慢させる。与えるにしても待たせる。泣き叫んで要求するときが勝負である辛くてもやり通させる。辛抱とは辛を心に抱くこと。

辛抱は人生修業である。辛抱は子供に限ったことではない。大人社会はなおのこと堪え忍ばねばならぬことが多い。「難儀苦勞は身の上の宝」と思えば、これ「また楽し」である。

辛抱を心の心棒にすれば、人の信望が集まり、仕事も事業もバランスよくクール、クール回る。

「辛」と「幸」の字は横棒「一」が違うだけで大部分同じである。辛抱して幸せになる」という漢字を作った人の教えである。

人生はヴーメラン

ヴーメランは、アフリカ原住民の狩猟生活道具に端を発したと聞く。への字型に曲がつたものである。投げると元に戻ってくる。不思議に思った。「情けは人のためならず」を近頃の若者が誤解して、「同情なんかしても、されている本人のためにはならない。下手に同情なんかするな」という意味に遣うそうである。「偽り」の字を分解すると「人」と「為」からなり「人の為」だが、実は「いつわり」である。

人は、自分がしたように相手もして返す。なんの不思議もない人間世界の条理である。

殴	殴	殴	殴
つ	つ	つ	つ
たら	たら	たら	たら
蹴	蹴	蹴	蹴
たら	たら	たら	たら
罵	罵	罵	罵
倒	倒	倒	倒
す	す	す	す
れば	れば	れば	れば
罵	罵	罵	罵
倒	倒	倒	倒
さ	さ	さ	さ
れる	れる	れる	れる
目	目	目	目
には	には	には	には
目を	目を	目を	目を
歯	歯	歯	歯
には	には	には	には
歯を	歯を	歯を	歯を

人生はブーメラン

人は思いを掛けた分だけ、思いを掛けられる

愛されたければ愛しなさい

笑顔がほしければ、笑顔を掛けてあげなさい

やさしい言葉がほしければやさしい言葉を掛けなさい

挨拶してもらいたければ、挨拶をしなさい

手紙がほしければ手紙を出しなさい

eye to eye.

hand to hand.

もらいたければ与えなさい

ギブ アンド テイク

肝腎なのはギブ が先なんだなあ

オオムンダイ

私の家内の祖母は、晩年、庭で転んで骨盤を骨折して以来寝たつきりだった。夜になると枕元のカラカラに焼酎と氷砂糖を入れて飲み、それを楽しみにしていた。行くと私にもすすめてくれた。「はがんまさるオオムンダイ わぬちゆいし ぬまりゆんむい はなしどうしゆようてい ぬまなうきゆみ」(こんなに美味しい 泡盛酒 私一人で飲めようか 愛しい友達寄り合つて 飲まずにはおれん)とよく唄っていた。与論
与論では、焼酎を以前はオオムンダイ(泡盛酒)と言っていた。与論語で「オオ」は泡、「ムン」は盛る、「ダイ」は酒を意味する。これは各家庭で炊き、すべて泡のである強い酒だったからだと考えられる。焼酎は醸造をして最初にでくるのは泡をだす。泡が盛り上がるころから名づけられた。出始めの酒は度数が五十度から七十度もあり、「酒の出はな」を意味する「ダイヌパナ」と言っていたが、今では「花酒」という美しい名前になっている。沖縄ではそのまま、「泡盛」としてブランド

に押し上げた。

昔は、焼酎は貴重品だった。薬、ヌチグスイ（命の薬）という言われ方をしていた。嫁をもらいにいくにも一升ビンなんかじゃとてもなかった。一合ほどこか入らない、カンビンかカラカラだった。

西信義翁は名うての篤農家で、翁が寄り合いに持参する酒は、度が高く、「度の高さ」でも有名だった。

そんな貴重で美味しいものを、自分一人では飲めない、友達寄り集まって分け合って飲むというのだから、歌に込められた心を大事にしていききたいものである。今は、酒の製造は国が取り上げ、大量に回収しているのと反対に、前述の歌の心の度数は落ちていくのではないか。

各家庭での酒の製造が禁じられ、密造取り締まりの税務官が巡回してくるので、その目をのがれるために藪の中に穴を掘って酒瓶壺を埋めたり、その当時庶民が取った抵抗策としていろんなエピソードがある。ある家に税務官が来た。その主人は、包丁を取り出して庭の砥石で研いだ。税務官に話し掛けられても、返答もせず黙々と研いだ。そのようすに恐れをなして逃げ帰った。また、ある家では、酒醸造中に税務

官に踏み込まれた。その女主人は女傑で有名だった。その女主人はとつさにカハン（腰巻き、当時はパンツはなかった）をまくり上げ、あそこを丸出しにして税務官に詰め寄った。税務官はホーホーのていで退散した。警察官が常駐していない大島の離島に、サバニに乗って税務官がやって来た。住民が後に回って、その船を引っくり返した。それ以来その島には来なくなつた等、民のささやかなレジスタンスがあつた。

日本人は、遺伝子（DNA）によつて、酒の飲めない下戸が一割、飲めるのが五割、残り四割は翌日に残る三通りに大別されるという。下戸の一割は、飲むとジンマシンが出て体が受け付けないタイプ。飲む五割は、肝臓でスムーズに分解して翌日に持ち越さない酒豪タイプ。アルコールは分解の途中でアセトアルデヒドに変わるが、これが有害で、二日酔いを起こしたり、発癌物質になったりする。四割の人は、このアセトアルデヒドの分解がスムーズでなく、長時間体内に残り悪さをする。練習によつて酒が強くなつたと勘違いするのがこの四割組だそうである。酒の強い弱いは、遺伝子が司る分解酵素による、いわば先天的なものだから、自分を知って付き合うことが大事になつてくる。酒に強いのが偉

いのではない。自分の分量、つまり自分と他分を知り、酒とも友とも付き合うが肝要。肝要とは肝臓に要。人をもてなす与論献奉も「自分と他分」をわきまえて程々が肝腎。

「人を知るは、酒が近道」、酒は憂いを払う玉簪、酒は百薬の長」等の言葉は飲んべえにはいいが、あとの半分の人にはオオモンダイ。



足るを知る

この文字は、京都龍安寺の手水鉢に刻まれていて、4つの漢字

「吾、唯、足、知」が口を真ん中にして組み合わせたものである。

「吾、唯、足るを知る」と読む。

お坊さんが朝起きて、この手水鉢の水鏡に自分の顔を映し、「ああ！ 今日まっさらな一日を与えてくださいますありがとうございます。今日一日一生懸命修業に励みます」と誓い、顔を洗うのである。

「足るを知る」は、人生の充実、幸福の出発点で終点のように思える。

中村久子女史は、幼少の頃、病で両手両足を切断し、ダルマ娘と侮られながら、結婚して子供を産み育て、七十余年の生涯を遂げた。中村氏の詩の一部「短いけれど 指のない まるい 強い手が 何でもしてくれる 断端に骨のない やわらかい腕もある 何でもしてくれる 短い手もある ある ある ある」とうたっている。失ったものを見るのではなく、あるものを見ている。

もう少し美しかったら、もう少しお金があつたら、もう少し若かつたら、親があんなにしてくれたら、子供がこんなにしてくれたら。たら、たら、たら……

文句たらたら。

人生八十年。もう七十だからと思うか、まだ七十だからと思うか。「もう」か「まだ」か。あと十年しかないとみるか、あと十年もあるとみるか。「しか」か「も」か。

プロ野球の投手は、今握っている一球に全魂を打ち込んで投げる。この一球を投げて、ホームランを打たれたら交替を命じられるかもしれない。この一球が俺の命だと「一球入魂」で投げる。次の球も。またその次も。その連続が投手の命、人生。

横綱千代乃富士が1000勝を達成したとき、記者が「次の目標は何ですか」と聞いた。「明日一勝することです」と答えた。もつと大きな目標を言うだろうと思っていた私にはがっかりな返事に思えた。しかしよく考えたらそうではなかった。明日の敵を倒し、また一つ白星を加える。その一つ一つが集まって1000になったのだから、全力を尽くして「明日一勝」と。さすがに大横綱は言うことが違うと感服した。

今あるもの、今いるところに満足し、それを生かしていく。過去も未来もなく、現在あるものを最大限に生かして生きる。線は点の連続、人生は一日の連続。輝く人生は、輝く一日、今、唯 吾にあり。そんなことを朽ちることのない固い石の手水鉢に刻んだ坊さんは偉い。(平成5年2月記)

あたりまえ

井村和清

こんなすばらしいことを、みんなはなぜよろこばないのでしょう
あたりまえであることを

お父さんがいる
お母さんがいる

手が二本あつて、足が二本ある

生きたいところへ自分で歩いてゆける

手をのばせばなんでもとれる

音が聞こえて声が出る

こんなしあわせがあるでしょうか

しかし、だれもそれをよろこばない

あたりまえだ、と笑つてます

食事が食べられる

夜になるとちゃんと眠れ、そしてまた朝がくる

空気をむねいつぱいにすえる

笑える、泣ける、叫ぶこともできる

走りまわれる

みんなあたりまえのこと

こんなすばらしいことを、みんなは決してよろこばない

そのありがたさを知っているのは、それを失くした人たちだけ

なぜでしょう

あたりまえ

一粒の米がたどった道

私が中学生の頃（昭和25、6年）は、学校から帰ると農作業の手伝いをさせられた。手伝いというよりは分担者として組み込まれていた。

稲作の時期になると、父が鋤で田を耕した後、牛に石引きを引かせて泥を細かくし、田をならす仕事をした。その際肥料としてソテツの生葉を切って田のなかに踏み込むのである。生のために刺が刺さったりして痛かった。寒い雨の日でもびしょぬれになり、がたがた震えながらも続けなければならなかった。作付け時期があり、水田だから雨が降ることは天の恵みと考えているから、寒いなど言ってはいられなかった。赤土の細かい粒子は寒さでしわのよった皮膚に食い込み、水で洗っても落ちない。そのまま寝るから皮膚の表面にひび割れが無数に走り、血がにじみ出る。布団の中で足が暖まると、足が微熱を持ち、何ともいやな感じだった。その足で翌日、また入る。

田の端から端まで縄を張り、それに添ってみんな並び苗を植えていく。ソテツの葉を敷き込んであるから、ときどき爪の間にソテツの刺が刺さり痛かった。しかし誰も痛いという人はいなかった。当たり前のことだったからである。

足しげく見回り水加減をしていく。台風、害虫、稲の伝染病、ねずみ、すずめの来襲に気を配り、対策を立てる。刈り取ってから日も干し。夏のスクールが来るときは、そ

れこそ息急き切って取り入れ、また干す。米という字は分解すると八十八となる。食べられるまでに八十八回も人手をこめるからだという。

雨が降って農作物の植え付けができるようだったら、農繁休暇といって学校は休みになった。先生も生徒も一斉に家に帰って農作業をした。自分で作らなければ食べられなかったからである。苦勞して作ったものだから粗末にできなかった。食物、物を大事にしなければ「罰があたる」と叱られた。

現在の子供たちはこの苦勞をせず、食べ残して平気で捨てる。鉛筆、消しゴム、学用品も大事にしない。傘や洋服まで置き去りにして、また買えばいいやと平気である。子は親の鏡。その子の親もやや近いのではないか。

一粒の米のたどった道のり、一本の鉛筆がたどってきた道のりを話しておくことは無駄じやあるまい。消費は美德にあおられて塵の山ができた。資源枯渇問題、環境問題に多少なりとも役立つのではなからうか。

昔はよかったという懷古趣味ばかりではなく、やはり「もったいない」の思想は残したいものである。

そうしないと私たちの怠慢に神罰がくだらないとも限らない。

松竹梅

松竹梅はめでたいものとして広く慶事に用いられている。

「松に古今の色なし」。

松は、千古の昔も今も、夏も冬も年から年中変わらぬ緑をたたえている。葉は、夫婦のように対で、常に一緒である。この松のように年から年中若々しく、仲良く、変わらず平和で豊かな暮らしが続くようにという願いを込めて松を愛でるのである。

松は正月の門松として立てられる。神様（福の神）が天降ることをマツ（待つ）意味だと思われる。

「竹は上下に節あり」

正月は年の折り目の節。竹は、節目節目を付けて天を指して真つすぐ伸びて立つ。上下に節があるから強い。雪国の竹は、冬の間中雪に押さえ付けられて曲がつているけれども、雪がとけるとまたすつくと天を指してまっすぐ立つ。しなやかで強靱。竹は中は空洞である。腹の中に何にもない。割るとすばつときれいに割れる。きつぷのよい、きれいさっぱりした人間を「竹を割ったような」と表現される。横にはきれない。軽くて丈

夫。さらには地下茎でつながっていて、家族一族の絆を結び合う。そんな竹の特性にあやかうと、人は竹をこよなく愛でるのだろう。

「梅は寒苦をへて香あり」

梅は春一番に咲きふくよかに香る。白梅紅梅華やかにめでたい。「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」。梅は再生力旺盛である。「梅は食うとも核（さね）食うな、中に天神寝てござる」といつて生梅の核に毒のあることを戒めた句もあるが、梅干しは薬果でもある。「梅干しは、酒も飲まずに顔を赤くして、年は取らずにしわ寄せて、もとをただせば梅の花、鶯泣かせたときもある」という傑作もある。

松・竹・梅。三つとも寒に堪えて茂るめでたい植物として、画の題材、家紋、歌舞、箏曲、物の名前、人名に多用されている。

日本人は、草木の生き方、姿に学び、これを愛で、折々に飾って生活を楽しむ、心豊かな国民である。

（平成3年12月）

タラソテラピー

子供の頃親の目を盗んでまで海に行った。日がな一日海水に浸かり、日焼けで皮はひと夏に三、四度むけた。白いのは歯だけだった。髪の毛も焼けて赤茶けた。中学校二、三年生にもなると、ピシバナ（リーフ）の外側に出て、立ち泳ぎをしながら二十メートルほど糸を垂らし、アーニーバイ（赤ネバリ）を釣った。波に揺られ揺られて、狙うポイントに餌を垂らすことができずにもどかしかった。また釣つても泳ぎながらだから手作業ははかどらなかつた。それでも外海に出るのは大人のステイタスを得たような気分で、漁獲量は内海より少なくとも外海へ出た。二時間以上いると波負け（波酔い）した。

昭和二十六、七年当時、私の同級生はすでにアギヤ―（船団を組んだ追い込み漁）に出て一人前の稼ぎをするのも少なくなかった。

旧暦三月三日の節句に、新生児の女の子のためにはザルを、男の子のためにはテルをつくり、家族ともども連れ立って浜にいき、ミ―ハマクマシ（新浜踏まし）をして海との関わりを重視している。「我は海の子・・・生

まれて潮に 浴して 波を子守の 歌と聞き・・・」

海洋民族は、幼い頃から海に親しみ、海の恵みを受けて生きてきた。琉球弧にある、ニライ・カナイ信仰は、海のはるかかなた（海底）に極楽浄土があつて、そこから豊穡がもたらされるといふものだが、今もその源流は変わらない。

タラソテラピー（海洋療法）が研究され、注目を集めてきている。これは海水に浸かり、波に体を委ねていると波動で癒され、海水のミネラルが皮膚から吸収されてストレス、生活習慣病、アトピー等の療法になるといふ。

子宮の中の羊水の成分が海水の成分と似ている。体液もほぼ同じ。これは生命が海の中で発生したからだといわれている。海Ⅱ生みⅡ産みⅡうみ。人間は、お母さんのお腹のなかにおるときが一番快適で安心しておれた。それを遺伝し（DNA）が覚えていて、それに近い海水にゆったり浸かっているといふ心身の療養になるといふのだから合点である。

浦島太郎が見たという竜宮城も海底にある。与論の海に潜っていると、ふと、浦島太郎が年を忘れたのもわかる。

田中一村は、魚や伊勢海老をまるで生きているように描いているが、あの絵筆で海中の光景を描いてもえたらどんなにか素晴らしいことだっただろう。海は陸の何倍も広くて深い。海の中の風景を描く画家が出てきてほしいものである。

与論の島は、島全体がタラソテラピーの療養所である。自然、環境、健康志向の未来社会にあつてますます重宝がられ、光輝く島、文明社会に疲れた人々の心を癒す愛ランド。

東洋の海に浮かぶ一個の真珠、と、田村博士は形容した。真珠貝は、内に美しい玉を育む。私たちの先人は、生まれながらに身も心も海の恵みを受けて誠を育んできた。真珠貝の中の真珠球に当たる部分が「誠」と思いたい。

打ちじゃしより、打ちじゃしより

誠打ちじゃしより

誠打ち出せば　ぬ恥かちゆんが

シーサー

沖縄にいくと赤瓦の屋根や門柱の上などに、シーサーが一對据えられているのをよく見受けられる。シーサーは獅子をかたどった魔除けである。片方は口を開け、もう片方は閉じている。開いている方は幸運が入ってくるように、閉じている方は入った幸運を逃がさないためだということだった。

仏寺の門の両脇に仁王様がいかめしく仁王立ちで門番をしている。片方は口を大きく開け、もう片方は閉じている。この姿は「ア・ン」という密教で説く胎藏界・金剛界の二界を表す。五十音の「あいうえお」は「ア」で始まり「ン」で終わるのも、宇宙一切のはじめと終わりがこの二つで完結することを意味している。

人が生れてくるとき「おぎやあ・あ」と口を開け、死ぬときは「息を引き取り」、しめる。呼吸は、「呼（はく）」がさきで「吸（すう）」があとである。吐かなければ吸えない。人も宇宙一切の産物にかわりはない。エジプトでも王様の陵墓をライオンに守らせているという。力の強い

ものに、悪魔除けをさせているのは共通している。

道の辻の突き当たりの所の岩石に、「石敢当」と掘り込まれていたり、石碑に掘り込んで建ててある。石敢当は剛力無双だったそうで、悪魔に對し、通せんぼをさせている。

節分の日、「福は内、鬼は外」と、炒り豆で悪鬼打ち払う。それを見てある子供が、「各家々から打ち払われた鬼は、どこへ行くのだろう、かわいそう」と言った。いまだかつてそんなこと思いもよらなかったドウダンミン男は驚いてしまったサ。

「悪魔が、かわいそう」という童の発想は神様の域である。

親鸞は、「悪人正機」をとなえ、善人が救われるのに、ましてや悪人はなおのことと説いた。阿弥陀様は、悪人を救うのを本願とする。大日如来様は、東方万八千世界をあまねく照らしだすという。童は神様というが、この童の神様のな心象風景を見た思いがした。

方言札

「『豚の心』ください」といわれた肉屋の店主は目を白黒させた。昭和三十年代、中学校卒業生が、金の卵と持てはやされ、見知らぬ大都市へ集団就職をしていった少年が、豚の肝臓のつもりでいったことばである。「肝」を与論語で「キム」という。「心」は与論語で「キム」という。「キム」は方言だから共通語では「心」になると思ったのである。わかってくれない店主を少年はいぶかしく思った。

その頃、与論中学校で卒業を前にした生徒達に、電話の掛け方を知らずに恥をかかせてはと、時間を設定して、払い下げの電話機を使って練習をさせた。生徒達も戸惑い、照れながらも真顔だった。生徒会や学級会活動等の努力目標や注意事項に「方言禁止」をあげ、職員、生徒ともどもに取り組んだ。就職先で生きる術としてみんな納得して声高にすすめた。方言を使ったものには罰として「方言札」なるものを胸や背中にぶら下げさせた。方言を遣った他の者を見付け、その札を押しつけていくという悲劇があった。ときには方言を遣った直後に気付き「方言で言えば」とくつつ

けて、罰を逃れるこそくな手段をとるズルもいた。テレビの時代になり、生まれ落ちたときから日本語の洪水の中で育っているものにとっては、今は昔の笑いぐさになっているが、当時は生きる術を身につけるためとして真剣だった。

当時、教職員の研修会で「方言禁止方策」について話し合っている席上、本土から招かれていた指導主事が、「方言遣ったっていいじゃないか」と発言した。私は、「あの人は何もわかつちやいない」と非常に腹立たしかった。その人の真意はよくわからないが、方言が急速に消えつつある今日を見越して、た方言の持つ意味の大切さをいわんとしたものであるならば、その慧眼に崇敬の念を禁じ得ない。

言葉は、その背景に生活感覚、様式、思想、理念、心等絶大なものを伴っている。それだけに与論語が消えていくことは、それと共にそれが持つ精神文化、心象風景が消えていくことなので残念である。

私の祖母は、昭和二十五年に沖縄で手術をさせ、腹の中から管を外に出したまま帰ってきて療養をしていた。息と息との間がだんだん伸びて死んでいくのがわかった回りのものが、大声で「呼び乞い（呼び戻し）」をした

ら、正氣に戻つて、「ヌガウラチヨウ、『ヤシンプウ』シランチイバ アビムドウシュウサー」と語氣を荒げて叱り付けた。「ヤシンプウ」とは、「安らかに休まる恩恵」を言う。祖母にすると、病魔に長い間苦しめられ、今その苦しみから逃れ、安らかに休まる恩恵にあずかるうとするのに、それを呼び戻すとは何事か、との怒氣だったのだらう。この言葉は、死さえ、天から授かる果報だとする思想である。しかもいまわの際に発すると
は?? 今でも感嘆の極みである。

しかし、今は死語になった。これに似た大切な与論語が埋もれてしまつたのではなからうか。言葉の埋蔵文化財として発掘保存できないか。そこまでいなくても、せめて今話されているものだけでもと思うのは、老いいくものの郷愁だらうか。

国際化、グローバル化が進む中そんなことにかかわらずっていは生きていけないかもしれない。英語も中国語もぺらぺらに越したことはない。ただ、母体につながったヘソがあるように、大切であつただけは留めてもらいたい。できればグンブス（出張つた大きなヘソ）がいい。

与論の心・敬虔

私が中学生のとき大型台風があり途中帰宅した。校庭に出て歩き始めた後から風が押して小走りにさせられた。菅原池のそばにきたとき、止まろうとしたが止まらない。そのまま土手を乗り越え、もろとも池にドボンだった。私の家はぐらぐらゆれた。「揺れるうちは大丈夫」といわれたが、ギシギシしぎし音がするし今にも飛ばされはしないかと恐かった。父も恐かったようで、「一晩だけの恐怖のためにかねてから備える」と言った。家は凹地に低く作り、周りに石垣を積み、樹を植える。みな台風の恐怖のためである。口之津への集団移住のきっかけになった明治31年の台風はいかほど大きなものだっただろうか。

神戸淡路大震災のような地震災害もある。与論の先人はこれを「天ヤウテユウラチムイ、地ヤ プギユウラチムイ」（天は落ちると思え、地面は突然穴があくと思え）と人知を越えたことが起こることを戒めている。「高頭ヤ シイジャ稲の穂」（頭の高いのは、突っ立っている稲の穂同様空っぽ）。与論の先祖は、ものいわぬ植物からも人生訓を学んでいる。大学を

出るだけが学問ではない。独学の吉川英治氏の言葉に「我以外皆師なり」とある。「親パジャンヌ子ヤ、世間パジャンヌ」（親を畏れない子は、やがて世間を畏れない大變な子になる）。

「ヒュウヤ ウレー チラ ヲウガデイ イチャリテイ」（今日は、あなた様の顔を拝んでいい気持ちです）。何とも心あたたまる言葉である。

「ヲウガミヤービラン」（拝み候）といういにしえのきれいな日本の心が残っているのが与論である。

方言研究家のある人に、全国の方言の中で最も美しい言葉を一つ上げるとすれば何ですかと尋ねたら、それは与論の「トオトウガナシ」だと答えた。私たちの先祖は、こんな尊いものを守り伝えてくださった。与論の民は、敬虔な美しい心の民族だと思う。「人敬めえ自己敬めえ」。人を尊敬する敬虔な心、我以外を敬う心のある人は立派な人間である。敬虔な心、畏れる心こそ、人間の学ぶ心の原点である。親は子供にきちんと言い付けてきかせる。そこから人間が始まる。「ミンタマシ チッコオリユウル子」（目で使える子）であれば言うことない。

泣き女

今は昔、葬式の時に遺体に寄り添い声を上げて泣くものだった。亡骸（なきがら）に呼びかけ、いたく別れを惜しみ、誰はばかりことなく大声で泣いていた。葬儀の間だけではなく、墓までの道すがら、墓についてからも泣き声の空間は、あたかも悲しみを閉じこめた風船玉の内側である。泣く調子に抑揚をつけ、哀調を帯びた神謡にも思えるものだった。中でも特にうまい人を「泣き女」として、その昔はわざわざ雇って泣いてもらうことさえあったという。

葬式・葬儀・告別式は、この世に未練を残さず他界してもらうための引導渡しである。別れたくないと切々と訴えて泣く。泣いて思いを断ち切る。泣いて死者に思いを断ち切らせる。一見矛盾したように思えるが、こうすることによって、死者にも生者にも思いを切らせる。それが双方の癒しであり、別れやすさになっているのだらう。泣き別れは双方の癒しである。

最愛の一人子を亡くした女がいて悲しみに明け暮れていた。生きかえらせたいと必死に願っていた。村の聖者のところに行けばそれがかなえらると聞き、さつそく聖者に願い出た。聖者は、「村を回って、ケシの実を一つもらってきなさい。ただ

し、葬式をだしたことの無い家からだ。そうしたら生きかえらせてあげる」といった。女は家々を回った。「ケシの実はあるけど、十日前、親の葬式をだした。夫、子供、兄弟の葬式をした」という家ばかりで、葬式をだしていない家は一軒もなかった。それ以来女は生きがえり、もとの暮らしに戻ったという。

女は死別の悲しみを受けていない人など誰一人としていないことを知り、心が癒され、死は普遍的でどうにもならないことを悟ったのであろう。

人は、人の悲しみや不幸を喜ぶなんてとんでもないと思いつながら裏腹な獣性にも劣る一面を宿している。「隣に蔵が建つと、うちでは腹が立つ」という悲しい人間の性（さが）がある。

「上見ればあれ星（欲し）これ星（欲し）星だらけ、下見て暮らせ星はないぞよ」。上を見ては心は癒されないが、下を見ると心が癒される。人は高い望みを持つが、それがかなえられないときは、下を見て自分を慰め、心の平安を保って生きていく。

泣き別れ。

泣くことによつて浄められる。成仏できる。成仏させられる。

泣き女。泣くことにもちゃんとした効用があり、神の摂理である。

人は涙とともに悲しみも流す。泣きなさい。

在如

沖縄のある家の神床の正面に「居如」と掘り込まれているのを見た。それにヒントを得て「在如」をラワン材板に浮き彫りにして掲げた。

「居」を「在」にしたのは、「在る」は「居る」の尊敬語で、「いらっしゃる、おられる」になり、より適切に思えたからである。

人は誰でも、神棚の前にひざまずくと自ずから神妙な気持ちになる。与論でよその家を訪問したとき、真っ先に神棚の前に行って座り、手を合わせて拝む光景を目にする。とてもいい風習に思える。

私の母は、起きるとすぐに神棚の前にいき、「今日も元気で起きられました。トオトウガナシ・・・」というのが習慣になっている。そして亡くなった旦那や父母と話をしているような風でユングトウをする。

盆・正月・祝祭時に家族がうち揃った中で、父がヌイトウ（祝詞）をあげる。文言は家族や一族の無病息災、除災招福、繁栄を願う内容である。しんみりと聞き入

る。ある時、父が「祝詞は、後に居る子供たちに聞かせるためのものだ」と話しているのを漏れ聞いた。なるほどと、ドウダンミン男は合点した。先祖に願い事を奏上する形で、実は後で聞いている家族への願い事を言っているのである。これは教育効果絶大ない方法だと思った。効き目は神様の御利益でしようか。

入学・卒業・進級の節目のときは、お母さんが吸い物のひと椀準備して、神前で躍進を祈願してあげると、親の期待感がストレートに伝わると思う。また、図画・作文・体育の賞状等をもらってきたときには神前に供えて、先祖に報告し祈願してあげると、ウヤイヤープジのご利益大だと思えてならない。与論民謡に「夜走る船はニヌハ星（北極星）が目当て、私を産んだ親はワンドウ（私が）目当て」を地でいったものである。

日本の美しい風習に、「陰膳」がある。これは、旅などをしてその場にいない人のために供える食膳である。家族の一体感、日本的愛の証である。

すでに他界した父、祖父母、前妻、伯父伯母、曾祖母、死後引き取った叔母等、霊・魂は存在するかどうかはわからないが、「いらつしやるがごとく」ふるまいたい、自分自身に言聞かせたいとして、「在如」の文字を神棚正面に掲げた。

平成十五年十月吉日

チユラクナシ（改葬）

人が死ぬと、地方によって土葬（埋葬）、風葬、水葬、火葬、鳥葬などをしている。これは人間はどこから来てどこへいくかという死生観によるように思う。

土葬は、土から生まれてきたから土に帰す。

水葬は、生命は海（水）の中で誕生したからそこへ帰す。

火葬は、炎となって天に昇る。

鳥葬は、主にチベット地方で行なわれていて、鳥によって天に昇らせる。

風葬は、与論では人里遠く離れた洞穴や大岩の陰（ジシ・ジンという）に棺を置き、風雨にさらした。与論では明治十一年風葬禁止令の布告が出されてからも厳しい取り締まりが行なわれた明治三十五年まで続いた。これは動物と同じように埋めるのはかわいそうだし、崇りを恐れたからだっただけではなからうか。

インドのネール首相は火葬後その灰は空からまかれたと報じられた。

太古の昔は風葬がごく自然で、普通に行なわれていたが、悪臭を放つなどから埋葬に変わった。「骨を埋める」と言えば永住を意味することからこれが各地で定着し、その後火葬が普及した。

与論でも火葬場ができ、それに移行するだろうが、「焼かれるのは恐い」という声もある。火葬がよいという理由に、改葬の重荷をあげている。「今の若い者ではできないだろう。わずらわしい。大変である」など。

改葬のことを、「ミゲーラシ（新しくする）」、「チュラクナシ（きれいにする）」、「ウガミ（拝む）」などといっている。死者に対する奉公の心である。改葬の前日は墓にいき、「明日はウレー（あなた）を軽く（またはきれいに）しますから」と霊に祝詞をあげる。家でも親戚が集まり、翌日持つていく白衣や手ぬぐいとお神酒、お膳を供え、翌朝の祈願・祝詞をする。翌朝夜が明けないうちに墓にいき、「これから御身をきれいにしつてあげますから、玉になつて（白骨になつて）拝まれてください」と祈禱をしてから掘り始める。白骨化しているだろうかという緊張が走る。

改葬の日は決まっています、ナヌカミシヤ（旧暦三月二十七日）、クーヌカミシヤ（旧暦三月二十九日）が主で、それに旧暦八月、九月の二十七、二十九でもよいとされている。しかし、私は父の改葬は、島外に出ている子や孫が集まりやすい日に揃ってご奉公したほうがよいと思い、夏休みにした。

当日は夜中からひどい風雨だった。が、集まる人の都合もあるからと決行した。テントを準備していつて張ったが、ほとんど役に立たない横なぐり雨だった。掘り出すと副葬品などが腐って真つ黒いのがくつついている。それを頭骨から先に出して洗い、姉に抱かせて、あとは慎重に砂の中から小骨まで残さず拾い出して洗い、拭いて瓶に納めた。

改葬は、与論語で「チュラクナシ（きれいにする）、ミゲーラシ（新しくする）、ヲウガミュン（拝む）」と言っている。いずれもある面から適切な表現である。「ヲウガム」は、もう一度会える肉親の情と敬虔さが込められていいものだと思う。他人のものだとそれこそ恐い汚いと思うが、育てていただいた親や兄弟なら懐かしさの情でいっぱいのはず。マタヲウガン（数年経って再度きれいにする）もある。火葬は一切

が断ち切られる思いでなんともやりきれなかった。妻を窯の中に押入れたときは、どつと、こみあげて押さえきれず、錯乱状態になりそうだった。埋葬は、思いが形で残り、淡い余韻がある。火葬場ができると生活習俗も思いも急速に変わっていくだろう。

（平成十四年秋夕まぐれ）

火葬の点火ボタン

私の知人が若くして死んだ。火葬のときの点火ボタンを中学一年生の長男に押させた。ボタンに手を掛けるのだがなかなか押し切れない。仕方なく祖父がその子の指を上から強引に押した。むごい光景だった。一番別れたくない人の手で生を断ち切らせ、死を決定付けさせるものである。そのことによつて死者への思いを断ち切らせ、再生独立の覚悟を付けさせるために役立つ儀式だと前向きにドウダンミンした。

私の前妻は、27才で二人の幼子を残してばたばたと死んでいった。名瀬で茶毘に付した。そこは重油バーナで押しボタンではなかった。それでもボンと音がして点火するときは、胸が張り裂けんばかりで遣り切れなかった。火で焼くのはやはり気持ちのいいものではない。しかし、埋葬して改葬するのにも面倒だということで、永良部や沖繩に運んで茶毘に付す人がふえた。与論の火葬場が平成15年10月、まもなくオープンする。火葬になれてくるとボタンを押すふるえも減るだろうか。

自分が焼かれるのを恐がり、嫌がり、さけるよう遺言する人がいる。しか

しそれも急速に少数派となる。火葬場のない現在、海を渡ってまでわざわざ茶毘に付しているのは、主に改葬のわずらわしさからである。

与論語にシニロウ、イキロウ、また、シニマブイ、イキマブイという言葉がある。漢字を当てると死霊、生霊、死魂、生魂である。これは肉体の中に霊または魂が宿っていて、霊・魂は肉体から離れたり入ったりすることがあつて、霊・魂はあの世でも生き続けるといふ思想からきている。魂は肉体から簡単に離れると思つてゐる。ひどくびつくりしたときに「魂又ガチ（抜け落ちた）」と表現するのはその証拠である。特に子供の魂は抜けやすいと考えられてゐる。そのため赤ちゃんの魂を取られないような呪いをする。赤ちゃんの死亡率は高く、それを防ぐための対策である。医療の発達してゐない時代の赤ちゃんの健やかな成長への祈りとも受け取れる。

お通夜は、魂を魔物に取られないように明かりをつけ膝を抱いて夜どおし寝ずの番をするのが原義である。「御霊遷し」は、位牌に「霊」を遷し、以後それを拝む。三十日の床上げは、神棚にそれをあげる儀式である。

葬式は、死者に死の自覚をさせ、現世への思いを断ち切らせ、あの世に旅立たせるためのものである。一番近い人が「迷わずに真つすぐ行け」と死者

(霊)に言い聞かせるのはそのためである。いわば、引導渡しである。告別式はストレートに「別れを告げる」式としている。

棺桶のふたの釘打ちは、今はブーク人がしているが、古くは一番の近親者がしたようである。これは、死人に他界したのだから、迷い出ることのないようにという意味がある。風葬洞穴の入り口に石を積み上げてあるのも、霊が這い出ないためのものだと言った。

葬儀は、死者が未練なく成仏し、現世に這い出てきて祟りを起こしたりしないためのものである。また他方、喪主や後継者の自立を自覚させる意味もある。

冒頭の若くして逝った父の火葬ボタンを押した長男は、自立、自覚を自分の心に点火したに違いないと思った。

(平成十五年十月)

霊

人は死んでどこへゆくのだらうか。

三途の川を渡つてあの世にゆくという。その渡し守に払う金をちやんと棺桶に入れて持たせる。渡つたらそこには閻魔という恐ろしい大王が金棒を持つて待つていて、生きていたときの功罪から地獄行き、極楽行きと裁くのだそうである。

私の母の父は、子供心にも豪快に生きていたように思う。死ぬ日には、朝起きて「今日は真つすぐチツトウーユクトウヨー」と言つて、私の父が注ぐ酒を美味しいといつて飲みほし、「盛国、三線（サンシヌ）持つて来い」と命じ、盛国に抱かれて座り、三線を引き、家族や回りの者に別れを告げて死んでいった。

その前の晩、宇勝（ウワーチ）の墓の中では三線や太鼓を打ち鳴らす大にぎわいが聞こえて来たので、明日はどんな偉い人が亡くなるのだらうと思つていたら、行中ウプだった、と後日墓の近くに住んでいる人が語つた。その人は霊能者風で、死人がでたら、墓からなにかが聞こえてくるそうである。高德な人の時は賑わうそうで、その晩は大にぎわいだったとか。行中ウプならさもありませんと生前の善行を語つてくださったと、母は誇りにしている。敗戦も間近

かな昭和二十年、日本の特攻隊の飛行機が、沖縄に行き着かず、与論の上空で射たれて、燃えながら落ちてきた。特攻隊員の一人は、落下傘や洋服に火がつき炎をあげながら寺崎線の道ばたの松の木をかすって落ちてきた。すでに息絶えていたが、童顔可憐な美少年だった。寺崎墓地の西側端に埋葬した。墓には、誰かがときどき花を飾って供養していた。後年遺族が来て御供して帰った。

その松の木の上に、戦鬨帽を被った兵隊がときどき立つと噂された。夜そこを通るときは、恐々その松を見て通った。無念のうちに死ぬ人は、成仏できずにこの世を徘徊するという。燃料は片道の分だけを積み、知覧を飛び立った特攻機だと聞いた。洗脳されていたとはいえ、無念だったことは百万言尽くしても否定できないだろう。五百キロもの空の旅、何を思いながら飛んできたのだろうかと思えば胸が痛む。その隊員の無念さを人々がおもんばかり、松の上に押し立てたのであろう。

死人に対する祈祷に、「道が別れた以上は、迷わずに昇天してください」というのも、悪霊となつてこの世を徘徊してもらったら困るといふことなのでしよう。出棺して墓に向かうときに位牌を抱いている人が、後を振り向くことは厳に禁じられている。これも霊に振り向かせては困るからである。昭和初期までは、死後四十九日目にはヤブを呼んでムンジュトウ（思い事）死者がこの世

の近親者に思い残したことを語らせたという。

正月ニゲ―を今でもしているところがある。これは主に海で死亡した人の霊を祭るのであるが、地上の変死者の祭の場合もある。昼の上で死ねなかつた故に荒神となつて崇つてもらわないための鎮魂祭である。祭主は一週間以上も禁忌をして、「チットートウ 内 外の子や孫に タタイグトウ チカイグトウ

あらしめてくださるな」と厳肅に唱えるのである。

霊の信心は、人それぞれに温度差があるがその差異は、生き方につながつているように思える。妄信はどうかと思うが、敬虔さは大事である。保険金を掛けて殺すなんぞは、その欠けらもない。葬祭の儀式はその意識の涵養に肝要な役を果たしている。

墓

沖縄の墓は大きく、立派である。その考え方として、人間はこの世にいる年月より、あの世での方がずっと長い。だから自分の家よりお金をかけてつくるのだ、という説明だった。なるほど。その上、門中墓、つまり一門の墓である。一族が入る墓だから大きくなければならない。

亀甲墓と破風墓がある。亀甲墓は、字のごとく亀の甲羅に似ているからであるが、お母さんのお腹を意味し、入り口は子宮の入り口だそうである。人間はお母さんのお腹の中から生まれて、また生まれたところに返るからという考え方に基づいたものだそうである。なるほど。破風型は、あの世でのお家だから合掌屋根にしてある。

沖縄は二墓制になっていて、シルヘラシー墓（汁減らし。つまり腐敗させて肉を落とす）と納骨墓とになっている。一つの洞のなかに部屋を分けているものもあるとか。土葬ではない。与論で土葬は明治年代、風葬禁止令がやかましくなつてからという。沖縄でもみんながみんな豪華な墓を持つていたのではないとか。しかし、さほど離れていない与論とかくも違うとは驚きであった。与論も経済的に豊かになり、数百万円掛けた御影石の立派な納骨堂が目立つように

なつた。益々立派なのが建つと思う。しかし大和式で、機能面だけで、亀甲のような思想面は加味されていない。

沖繩では墓正月をするとところがあるという。その時は遠くブラジルからも来るといふ。一族が集まるといふのは古きよき風習で崇敬される。

墓の字を分解すると、莫と土。莫は、太陽が草のなかに沈んで隠れることを示す。これは死後の世界は、太陽と反対の地面の底、海の底、夜。与論で葬式のとき提灯を先頭にして墓に御供する、また位牌に傘を差すのもこの思想である。改葬のとき、太陽が登るまでにするもの、ハタサー（頭骨）に傘を差すのも同じ思想からである。死んだら、太陽が沈む西の海底にいくと考へている。これは、死体を墓に御供するときに、ジンブードー ヨウヨウドー（順風だ、風だ）と声をかけているのは、船に乗って西の海底にいく、ニライカナイ思想である。西方浄土思想、陰陽思想でいうと西は陰、夜は陰である。死んだら天に登るといふのは夜の天、夜空の星になるのも同じ思想。死後の世界を考へるのは人類の永遠の課題に思へる。

人は死んだらどこへ行くかを考へるのは、今をどう生きるかであり、生活様式まで規定する。ドウダンミン男はおもしろいと思う。

死後の歳祝い

干支にちなんで十三、二十五、三十七、四十九、六十一、七十三、八十五歳の七回歳祝いをする。死後二、三、七、十三、十七、二十五、三十三の七回年忌祭りをする。

与論では八十八歳（米寿）のときはトオカキ（舁の縁を水平にならす四角い棒）を作り、それを飾ってお祝いをする。寿命いっぱい生きた目出度いことを意味し、これにあやかるとするために記念として親族各戸に配られる。トオカキ祝い（寿命も祝いも満杯の意味）を過ぎたら、八十五に十二を足した九十七歳の祝いは、元に戻って十三祝いといつて赤いちゃんちゃんこを着せて行なう。ちなみに沖繩ではこの祝いは「カジマヤー（風車）」といつて、赤いちゃんちゃんこを着せて風車を持たせて、隣近所を回る。

与論での歳祝いは、四十九歳までは親子兄弟だけでして、六十一歳の還暦祝いは親族を集めて大きなお祝いをした。昔は人生五十年といわれ、六十一歳の還暦は長寿でめでたいたし。今は人生八十年、昔のような還暦祝いはなく、同窓生が集まって自分たちで祝うぐらいである。

「祝いはその家の主人の顔をみて集まり、悔みは、あとをみて集まる」といわれる。人間の欲得を見透かしたいやな言葉だが、それが条理だと割り切らなければ世の中がみじめで悲しくなるばかりである。「飲み食いには他人が集まり、悔みには身内が集まる」も同様に人の情理。

日本本土社会で、還暦を過ぎて、七十三、八十五歳の歳祝いをするかどうかは知らないが、還暦をすぎると古希、傘寿、米寿、卒寿、白寿のような字にちなんでしているように思える。

古希・・・「人生七十古来稀なり」から、七十歳の祝い

喜寿・・・「喜」の字の草書体が七十七になることから

傘寿・・・「傘」が八十を含むことから

米寿・・・「米」が八十八と読めるから

卒寿・・・「卒」の通用異字体が「𠂔」で「九十」と読めるから

白寿・・・「白」の字が「百」の上の「一」を取って九十九になるから

茶寿・・・「茶」を分解すると「草かんむり」が二十で下は八十八で合わせ

て百八歳

皇寿・・・「白」九十九に「王」は「一と十一」合計して百十一

大還暦・・・・百二十歳

＊満九十九歳は、数え年でいうと百歳になり、百歳の祝いとなる。

＊生まれたての赤ちゃんに、百二十の位付けをするのは、これを最長と考えたからであろう。ちなみに中国は二百歳である。

与論で、死後一回は「歳祝い」をしてあげる風習があることを聞き感嘆した。例えば、還暦以前に死んだ家族のために該当年が来たら、その祝いをしてあげるということである。死んでも魂はまだいっしょの感じである。まことに美しい。わが与論島は、「魂の島」の感を深くした。

その人が死んでから迎える盆や正月、三月三日は、あの世での初盆、初正月、初三月三日ということでごく近い親族が集まって祭ってあげる。以前は「トウムンチ」といって、死者のあった家は、三月一日、三月十五日、八月十五日、十月十五日に墓地に集まって酒宴を開き、霊を慰めたそうだが現在は衰退した。

これら死後の祭りや行事から、祖先崇拜の強い与論島的美風を思い知らされる。人間は忘れられてしまうほど悲しいことはない。近親者であればあるほどその感がつる。生活の合理化の美名のもとに、先人たちが大事

にした崇拜心の心象風景が汚されているのではなからうか。

越えられないあの世とこの世に別れていても、ことあるごとに、思いを届け、ともにあるやすらぎに浸る先人の豊かさに尊崇の念を深くする。

健児の塔

徳田久保則は、沖繩師範学校生だった。休みで与論に帰っていた。

ウトは、夜中、玄関の床下で「くうっ、くうっ」と雌鶏の落ち着かない声を聞いた。翌朝床下を覗いたら大きなマツタブ（アカマタ蛇）が卵をドグロ巻きにしていた。帰省中の久保則を呼んだら、弟の北沢を連れて二人でやってきた。久保則はウトの実家の子でウトは殊の外可愛がっていた。

マツタブは、卵を呑み込み腹を膨らして動きが鈍かったようで、難なく捕らえられた。しかし、その大きさにだれもが、今まで見たことがないと、びっくり。蛇は殺したと思っても生き返ってきて、仕返しをするから、竹杭いで身動きできないように七本打ち込んで止めた。あまりにも大きく人にも見せようと道端の畑にした。聞き付けて見にくる人もいた。

間もなくして、沖繩師範から、「すぐ帰れ」という電報が久保則にきた。米軍が沖繩に迫っていたからである。

久保則は、剣道は学校を代表する腕前だった。成績も優秀で級長だった。その上

正義感は一、二倍強かった。

取るものもとらずあえず、わざわざサバニを貸し切り、前浜から沖縄へ渡っていった。果ては、健児の塔に眠ることになった。

ウトは、あの時、わざわざ行くことはなかったのに、と何度も嘆いていた。しかし、あの時彼を止め得た人はいなかったであろう。彼は死ぬと分かっていたても行つたはずである。

徹は、健児の塔へ行った。お土産品店や花屋がある広場から海岸の方へ下つていった。木が茂り、ひんやりとしてきた。岩が切り立っている。前方は海へ視界が広がっている。右側やや下つたところにそれほど大きくはない洞窟があつた。そこが沖縄師範生の避難壕で、何百名という若き青年がひしめき合っていたところである。若き血潮はたぎるも、思うに任せず、弾丸玉あられ、親兄弟を思い、息をひそめていたであろう。

左側の切り立った大きな岩陰に、健児の塔は建っていた。塔の四方に名前が刻み込まれている。徹はあわてて、目を見開き、「徳田久保則」字を探した。徳田、徳田、徳田……。それだけを追つた。碑を回つた。……

あつた。瞬きをしてもう一度見た。確かだ。「徳田久保則」だった。

だんだん徳田久保則の字だけがはつきりと大きくなつてきた。

胸の高鳴りはそのままである。見付けた安堵が治まったら、今度は懐かしさがこみあげてきた。

指でその文字を撫でた。

いろんな思いが去来した。ウトばあちゃんと言っていた「あの時、わざわざ行かなきゃよかつたのに」も浮んだが、すぐに「止むに止まれなかつたんだよなあ」という呼び掛けに変わった。

心の中で、久保則兄にあれこれ話し掛けていた。「無念だったろう」とも言った。希望に満ちた凜凜しい久保則兄の姿もあった。ひとつこひとりいなかった。鳥の声、虫の声すらなく、寂としていた。久保則兄と徹二人だけの幽玄の時間が流れた。

徹は立ち上がり、周りを見回し、もう一度「徳田久保則」の刻みを見た。手を合わせ「また来るね」と言つて、徹は歩きだした。

壕の方をもう一度見た。ややあつて蝶々が一匹飛んでいると思つた。上り坂を思いにふけりながらうつむきかげんで歩いた。さっきの蝶々が頭の上、横を飛んでいるのに気付いた。ついてきた。追い払う気はなかった。やはりついてきた。妙な蝶

々だと思った。

広場に出たところで道脇の木が途絶えた。そこまで来てその蝶はようやくその木に止まった。四・五歩歩いてから、徹は振り向いてその蝶をまた見た。靈氣のよ
うなものを感じた。

ずーと以前に北沢兄（久保則の弟）が、「健児の塔の参拝歸りに蝶々が追つてきた。久保則の靈が乗り移り、追つてきたような感じにおそわれた。」という話を思い出した。徹はしみりとなった。その日は、そのことが体の中によどみ、一日中離れなかった。

日本復帰

昭和二十八年十二月二十五日、奄美大島は日本に復帰した。それまではアメリカの軍政下であり、日本への渡航は禁止されていた。勿論日の丸の国旗を掲げることも許されなかった。

奄美群島民は、熱烈な復帰運動をした。署名運動、断食祈願。あれほど群島民が心を一つにしことはかつてなかったし、これからもないであろう。民族の血をたぎらせた。その中であつて、永良部と与論は切り離されるらしいというわさが一時あつた。それにまた、永良部と与論島民は踊らされた。

復帰運動の甲斐あつて、十二月二十五日には、クリスマスプレゼントとして、アメリカの国務長官ダレスが、「奄美大島を日本復帰させるという声明を発表する」と報じられた。そうなると奄美と沖縄の間は、旅券（ビザ）なしでは行き来できなくなる。

徹は、昭和二十八年は那覇高校一年生だった。父は沖縄軍政府に勤めていた。徹は在学証明書をもらい、二十四日の夜、泊港から与論行の船（大

洋丸約三十屯）に逃げるようにして乗った。父は公務員の身分だったので二十五日後でも帰れるということだった。

船は逃げ帰る人で超満員だった。徹は物珍しさも手伝って舳先にいった。海は時化ていた。船の舳先は高く持ち上げられたかと思うと、その次はストーンと落とされる。落ちるときはスウート体が持ち上がり、息を呑む。無重力状態である。気分がよかった。そうこうしているうちに気分がおかしくなってきた。船酔いである。波しぶきも被ってきた。誰かが大声で危ないからおろろといった。徹は這ってダンブル（船倉）に割り込ませてもらった。

沖に出るにしたがつて、ゆれは激しくなった。横に縦に、揺れに揺れた。波に高く持ち上げられてから次の瞬間波底に落とされる。ばしや々と波しぶきを立てて落ち、ぎしぎし、ぎーぎー音を立てゆさゆさした。今にも船が分解するのではないかと思われた。

恐怖で、もう船酔いなんか消えた。百戦錬磨の船長が判断し、操縦しているのだ、間違いあるまいと恐怖を何度も打ち消そうとした。「チットオートゥガナシ」という祈りの小声が聞こえた。引き返すかどうかしてくれな

いかと必死に思った。夜中の十二時を過ぎると渡航できないという思いが船長にもあつたと思う。五十年たった今もあの夜の恐怖は鮮やかである。

与論に着いたのは夜中をとくに過ぎていた。

「フタビ、ヌチパジリティンネークトゥ、ニヤーナユン（今回、命落としてないからもう良い）」と誰言うもなく言っていた。

新生丸沈没事故

奄美の日本復帰の年に、新生丸沈没事故が起きた。

貨客船・新生丸（十八トン）は、一九五三年二月三日午後五時、安謝港を出港。四日午前三時ごろ、沖永良部・知名町屋子母海岸沖（陸近く）で高波を受け沈没した。事故当時、周辺海域は荒れていた。

新生丸の定員は乗客・乗員六十人だが、実際には八十二人が乗っていた。生存者は船長と乗客一人の二人だけだった。事故の犠牲者の大半は、当時沖縄で働いていた沖永良部出身者だった。奄美群島民は、当時本土に渡る

ことはできなかつたので、沖縄に職を求めていたのである。

この痛ましい事故があつた後だつただけに、先に述べた十二月二十四日に逃げ帰つた私は、同じ運命をたどらなかつた幸せ感を深くした。

編入試験

徹は、明けて一月四日名瀬にいった。父茂徳は沖縄から大島事務局勤務に回つた。茂徳は前年度大島事務局から沖縄へ行つたばかりだつた。茂徳は、その間、徹を連れて回つた。そのことをひとに「猫が子供をくわえて歩くみたい……（猫は乳離れするまでに七回子供をくわえて居場所を移す）」と自嘲気味に話していた。

徹は、編入手続きのため大島高校へ行つた。外で待てといわれ、校舎の軒下で待っていた。何十分待つたか、先生が見えて「何しているのか、こののろま」といきなり怒られた。徹はどうして怒られなければならないのか、腑に落ちなかつた。

翌日編入試験があつた。徹一人、誰もいない教室でぽつんと受けた。日本復帰の文字どおりの大波、小波を徹は受けた。

えさ

人間より牛や馬や犬、猫が偉い。ずうーっと偉い。死んでも他人様の迷惑にならない。盛大な葬式もいらぬ。墓もいらぬ。墓標もいらぬ。地球上に50億の人がいる。一人一人墓がいてすると50億いる。核家族化とともに、墓も核家族化する。この先何百億・何千億と人は生まれて死ぬ。あ

とは墓だらけになってしまう。

火葬ならいいという。とんでもない。植物が折角お日様の恵みを受けて作った酸素を、生きている間中吸った上に、死んで後始末にまで使う。おまけに温暖化防止で規制しようとしている二酸化炭素を出す。あげくは火によつて清められ、きれいさっぱり天に昇ったと思つてゐる。

かというて野たれ死にすると人に嫌がられる。だからめつたに人が行かないところに着いた。これが風葬で、最も原初的だと思ふ。

チベットに鳥葬があり、揚子江に水葬がある。これが一番いい。鳥のえさになり、魚のえさになる。生きてゐる間に食べた鳥や魚に食べられる。御恩返しだ。

次は土葬だ。死臭を撒き散らさない方がいい。

私は土葬にしてもいい。せめて何千億かのバクテリアのえさになりたい。改葬もしなくなつていい。いづれ骨もぼろぼろになつて土になるのだから。骨壺だらけになつて始末に困る。

与論にも、その昔、樹上葬があつたという。これはヤブ（呪術師）など特別な人で、棺桶を樹上や崖につるしておくものである。

腐敗菌にさえ食わすな。そのままミイラにしない。大きなピラミッドを生きているうちに作らせてる王様がいる。あの人が地獄にいかなくて誰が地獄にいくだろうか。

ミイラにしたつてたかだか数百年、いずればろぼろ。東の間の気休め。太陽でさえ、宇宙でさえ、生まれてやがて死ぬ。生生流転、天理にはあがないえない。

と悟りたいものだが、どっこい悟れない。悟れないと思うのが悟りとか。

ピランチカ枕（へら枕）

ピランチカ マクラ シミティタバーリ。

これは、死生觀を言つたものである。ピランチカとは、芋掘りへらの柄のことで、それを枕にして死ぬような最期（さいご）願望である。つまり「その時までにはピンピンしてコロリと逝く」ことである。

「生、老、病、死」は、人間の四苦である。「病」が苦であることはいわずもがなだが、「生」がなぜ苦なのか、生まれることは喜びではないかと、長いこと疑問に思っていた。この場合の苦が「思うにまかせぬこと」だということが分かつて、初めてなるほどとうなずけた。

どこで、どの時代に、だれの子として、どんな天賦の才を持って生まれるか、これはまったく思うにまかせぬことである。思うにまかせぬ最たるものといつていい。

死は絶対であるが、いつどこで何の為に死ぬかは多少可能な面がある。

老も絶対であるが、心がけによつては多少遅らせることができる。

病は、祈禱により治るといふ俗信が明治の頃まであつた。成人病が、生活習慣病と名前が改まつたことからわかるように、その人の生活習慣によつてかかる病がある。裏を返せば、習慣によつてはかからなくてすむことになる。昔から「医食同源」といわれ、病氣を治すのも食事をするのも、生命を養い健康を保つためで、その本質は同じである。

食習慣で病も治せるし、病にもなる。

明明白白なのが酒。深酒を毎日続けるとアルコール中毒になっている例はゴロゴロしている。煙草と肺癌の因果関係も明らか。本人も知っていて、止めればいいものを「止められない」といつて止めない。

酒を飲みすぎたときの翌日の不具合。そうと知りつつまた繰り返す愚。一杯は人が酒を呑み、二杯は酒が酒を呑み、三杯目は酒が人を呑む。酒の上の舌禍、不品行は、ノンベーの後悔の種で常。

精神と肉体の相互作用もある。オリンピックの創始者クーベルタン男爵の有名な言葉、「健全な精神は健全な肉体に宿る」と。

くよくよすると胃が悪くなる。

恐れると腎臓が悪くなる。

悲しむと肺を傷める。

怒り過ぎると肝臓を傷める。

笑い過ぎると心臓によくない。

個性や意識が、病気を作り出すという、心身の因果応報。

(生死同原 篠原佳年著)

それはさておき、免れることのできない「死」をどのように迎えるかは、人間の最後にして最大の課題といえ大げさになるだろうか。

とにもかくにも、植物人間になり周囲に多大な迷惑をかけっぱなし^ている不様であつてはいけないという願いを表したのが冒頭の言葉である。

与論の人たちは、医者からあと一兩日の命を宣告されたら、家に連れて帰り、家族みんなで見守り旅立たせるのが通例である。これは望ましい習俗だとして古川医師は評価し、与論を「魂の島」として称え、作詞をし歌

われている。

不老不死の妙薬は何千年の昔から求められて止まない。しかしそんなものがある分けない。あるとすれば五次元以上の世界である。

安楽死、尊厳死大賛成である。

「見込みがなくなったら医者にかかることを止めて、きつぱりと最期を迎える準備をせよ」というのが私の遺言として置く。叶えて賜れ。南無阿弥陀仏。

散る桜、残る桜も散る桜

平成十六年六月

ドウダンニン

竹
下
徹

様の前にひざまずく座り方だから「トオトウビー」というようになったのではないかとすると与論独特の言い方だし思いを込めた言い方である。四十九の厄年を与論語では「クントウグンジュウ」という。これは「今度迎える歳は五十」という表現である。四十九死重苦で大変イメージが悪いのを言い換えた

与論の先人の叡知である。「プウク人」が与論独特の表現だとしたら、「奉孝」の字をあて、担がれている人への最後の孝行だとしたら、その役目の意味も重くなるとドウダンミンする。

メジロを与論語では、「オオムツクイ」という。メジロはいうまでもなく目のまわりが白いからであるが、オオムツクイは身体全体が青くむつくりとしているからである。

姿形が美しいことを与論語では「タガローショウ」という。沖縄語に美人をさして「ちゅらカーギー」というが、「カーギー」は顔のことである。

与論語は、丸ごととらえ、思いを込めた表現をしている。一つの単語でも思想から発したものであることを思えば、やはり与論の先人の偉さを思う。

嫉妬

悋氣（りんき）、やきもち、ジェラシーも嫉妬のたぐいである。

焼き餅焼くとて、手を焼く。餅は焼いても焼き餅焼く。焼いた餅をさらに焼くと黒焦げになる。ほど良い焼き餅は気持ちよい。

嫉妬を広辞苑で引いたら、①自分よりすぐれた者をねたみそねむこと。②自分の愛する者の愛情が他に向くのを恨み憎むこと。また、その感情。

花嫁が頭に「角隠し」を被る。角は嫉妬ではなからうか。

女性は、男女の愛情に敏感に反応するので、嫉妬は女性の特性的のように思われがちだが、決してそうではない。隣に倉が建つと、こちらは腹が立つ。人間の業である。勝ち気・負けん気、ライバル心は、嫉妬の兄弟。向上心は従兄というところか。

嫉妬は比較から生れ、劣った方が起こす。落差は、エネルギーを生む。

嫉妬は、人間関係の近い者に対して起き、縁のないものには起きない。その差が小さいと起きるが大きすぎると起きない。「出る杭は打たれるが、出

すぎる杭は打たれない」。あごひげは四・五日伸ばしたものは不精ひげとい
い、一年も伸ばしたものはトレードマークとなる。

貧富の差で発奮。

流水の落差で水力発電

気圧差で風力発電

比較から、優劣、美醜、上下、貧富、貴賤、嫉妬等々が生まれ、幸・不幸感の素になったりする。上の者は優越感を持ち、下の者は劣等感を持つ。従つて悪だとする。人間はこの煩惱から離脱して悟りの境地に安住しようと願う。しかし、所詮凡人には離脱できない。それに必ずしも悪とばかりは言えない。これをバネにし、成功した人も多い。「イエーキン

ピンスウン、サンダイチャ チジカンヌ（金持ちも貧乏も、三代とは続かない）」という与論の諺はそれを示している。さらに、「ピンスウ者又 子ドウ 成功ヤシウル（貧乏者の子供こそ成功する）」と追い打ちをかけている。

人間だれしも、ある程度の劣等感を持ち、その克服に努力し、身を引き締め生きているのではなからうか。少々の優越感に身をゆだね安らぎを

求める。過度でなければ劣等感も、優越感も、嫉妬もよい。人間そんなものだと思えば、妻の嫉妬も、自分の中に巣くう嫉妬心も許して心地よい、などとドウダンミン男は悟った風でいる。

修羅

仏教では人は善惡の行いによつておもむき住む迷界が六つあるといわれている。すなわち、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天。

お釈迦様の弟子に神通力にすぐれた目連がいた。目連は神通力を使つて死んだ母のいるところを見にいった。母はとつてもやさしく自分たちを可愛がりよくしてくれたので、きつと天界だろうと思つてそこへ行つてみた。ところがそこにはいなかった。おかしいなと思ひながら次の人間界にいつてみた。そこにも見当らなかった。仕方なく次の修羅界に回つた。そこにもいなかった。次の畜生界に下りた。どこを探しても見当らない。いよいよ不思議に思ひながら餓鬼界へいった。そこに痩せこけた母がいて、食物をしきりにねだつていた。変わり果てた母の姿に驚き悲しんだ。食物を与えると、母がそれを口もとへ持つていくと、いきなり燃え上がり、食べられない。何度しても食物はすぐ燃えてしまう。目連は、お釈迦様に母を救う方法を尋ねた。お釈迦様は、そのすべて

の母親に食物を供えて供養しなさいと言われた。その故事から、先祖の霊を供養して行なう盂蘭盆会が始まったといわれる。

子供にとつてよい母親がなにゆえ餓鬼界に落ちなければならぬのか、男もしばらく理解できなかった。目連が母親にあげる食物がたちまち火となり口に入らないことでもある。

運動会になると必死に我が子の応援をしている母親。大学受験になるといい大学に我が子が合格するように必死に祈願する母親。お釈迦様から見ると我が子しか見えない母親は真つ先に餓鬼界へ落ちゆかねばならぬものなのだろう。

日本は世界一治安のいい安全安心な国だった。全国どこでも一つの言葉が通じ、空気、水、安全はただだと思われていた。しかし、水はボトルに入れられて売られ、ガソリンより高い。ちなみに平成十五年現在、水は五百ミリリットル百三十円、二リットル三百円でガソリンは一リットル百四十円である。一昔前まで、中東では水は買って飲むときいて”へえー”といったものである。それはいいとしても、治安の悪くなり方、

モラルの悪さの加速ぶりは大変なものである。悪知恵は高度・巧妙をきわめてきた。その上、外国人犯罪は目に余る。犯罪は弱い子供、女、年寄を狙ってくる。弱みに付け込みあくどく手段を選ばなくなった。

二・三歳の子供を、その母親、父親、情婦、夫が虐待、なぶり殺しは聞くにたえない。この世の出来事とは思えない。まさに生き地獄。悪いことをしたものがゆくとお釈迦様でさえ予想しなかったのは、この世をなんと思っただろうか。お釈迦様でさえ予想しなかったのではなからうか。福岡県二区選出の古賀衆議院議員は、学歴をアメリカの某大学卒業と嘘をつき非難を浴びている。本人はその大学に赴いて調べ、十七単位足りなかった。弁護士任せにしていたのでうかつだったと弁明している。「これから暇をみて不足分の単位を取得する。議員報酬はいらない。辞職せずなお一層尽くす」としている。ドウダンミン男には、実に情けなくしょうがない。

大学を卒業したかどうか弁護士任せだったから、自分では分からなかったという。冗談じゃない、そんなことがあるものか。学歴詐称をした

よりも、その後の態度がなお悪い。民主党の管代表は、それをかばう発言をした。卑しく、哀れさえ感ずる。

中村修二氏は、中堅会社で青色発光ダイオードを研究開発した。ノーベル賞級の発明という評価である。会社からもらった対価は二万円だったそうである。今後の研究者のためにも思つて、二百億円の対価を求めて訴訟を起こした。判決は、「会社は、それによつて千二百億円あまりの利益を得ている、しかも研究開発は個人の力だけでしているので本人の取り分は、六百億円にもなるが、本人の要求が二百億円なので全額の支払を命ずる」ものでした。日本においては前例のない超高額なものだそうである。これはこれからも広範囲に利用が進む見込みだという。ボクシングの一試合で数十億円の金が飛びかう世の中だ。それに比べればお安いものだ。現在中村氏は引き抜かれてアメリカの大学教授である。このようだから日本の頭脳流出が以前から嘆かれていた。中村氏は青色発光体を開発し、今また日本の未来に青色をともした。男は喝采した。あの世にのみ地獄、極楽があるのでなく、この世にもある。孟子は、

人間の本性は善だとし、荀子は悪だとした。ドウダンミン男は、荀子に軍配をあげたい。仏教では、天、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄の六道としている。天界（極楽浄土）の次に人間界を位置付けている。今の世の中を当てはめたとすると修羅場もいいところである。

日本の歴史、世界の歴史をひもといてみても、争いは絶えてない。近くはイラク戦争。そして勝ったものが正義。

地獄は怒り、餓鬼はむさぼり、畜生は本能、修羅は自己中心なのだ。そうだが、世界の国々のトップリーダーはテレビ報道を聞くかぎり、みんな自己中心である。このままでいくとあの世の地獄は超満員になる。この世はそんなものだ。と諦観しないとストレスがたまる。人間といったって生物学的には畜生なのだから。過去幾多の人が人間の欲望、煩惱から逃れようともがいたことか。

所詮ドウダンミン男は、孫と遊び、孫が喜んでくれれば極楽とするか。

賞味期限

食の安全がやかましくなった。何万キロも離れたイギリス、フランス、ドイツ等で狂牛病で牛が死んだと報じられると、その国からの牛肉やその加工品が輸入禁止になる。アメリカで牛一頭が狂牛病だと報じられると即輸入禁止。アメリカ産の牛肉で牛井を売り物にしていた最大手の吉野家は、在庫が切れたので平成十六年二月をもってメニユーからはずすと報じられた。全国チェーン店のほとんどである。それを聞いたお客が、食べ納めとばかりに長蛇の行列を作った。

どうしてアメリカに狂牛病菌が持ち込まれたのか現地調査に農林水産省の役人が飛んでいった。その後対策状況の説明と輸入解禁依頼に、アメリカから次官級が来た。日本でも北海道などで7、8頭がかかっているのが見つかった。全国にその警報が流れ、与論の子牛も売れなくなった。牛一頭一頭に番号が付けられ、戸籍登録がなされた。その煽りで、鳥肉が売れに売れた。持ち直すのに二年はかかっただろうか。まずは復活してよかった。与論の子牛生産は急成長産業なので、長引けば大変である。

平成十六年の一月末には、山口県の養鶏が一度に鳥インフルエンザにかかり、数万羽が死んだ。原因は特定されてないが、渡り鳥が運んできたのではないかという。人間に移る種類もあるという。中国や東南アジアでも発生していて、そこからの輸入は禁止された。代りはブラジルから輸入されるという。これに昔流行ったという豚コレラが発生し、豚までころころいったらどうなるんだろう。死んだ牛や鳥は、焼却したり埋めたりしている。科学技術が発達した今、無害化加工し、役立てる方法を考え出せないものか、とドウダンミン男は思ったり。なにはともあれ、家畜一匹で、世界中の食卓が音を立てる、と言っても過言ではなくなった。

今、賞味期限を表示してない食品には何があるだろうか。

長女が二歳のとき、腐った牛乳を飲んだといって、小児科医院に連れていった。医者は「腐った牛乳など飲みはしないよ」と言っただけで診ようとしなかった。不服だったが、家へ帰って飲んだと思われる牛乳を飲んでみたがどうもなかった。子供もどうもなかった。男の勘違いだった。牛が食べる草には毒草はないと昔聞いた。動物は、触角、鼻、舌で毒か否かを識別する。

男が子供の頃（昭和20・30年代）鶏は放し飼いだつた。藪の中に巢を作り卵を産んだ。それが食べられるかどうかは、太陽にかざして見分けた。今は表示してある賞味期限で見分けている。10個1パックだから、期限内に消費できそうでなければ買わない。冷蔵庫に保管して、賞味期限をとつくに過ぎていても、割ってみてマフ（黄身が崩れていないもの）であれば男は美味しくいただく。期限が切れたものはすぐ捨てる人がいると聞く。期限が切れるとすぐ食べられないと思つているのだろうか。判断基準は表示で、他人任せということだろうか。

貧しかった古の昔、「姥捨て山」があつたという。やむにやまれぬ方策だつた、もしくは自分から進んでということもあつたでしようが、経済効果からみた人間賞味期限切れといったところだろうか。

退職後の初老の男性が、「粗大ゴミ」、「ぬれ落葉」などと揶揄された。さしずめ賞味期限切れということだろう。しかし、その人にとっては退職後

からが、人生の賞味期限と思つてゐる人も多い。

賞味期限の切れたドウダンミン男は、ピランチカ、マクラ、シミティ、タバーリ（仕事しながらコトツと逝くこと）がちらつくようになった。

かけ肥（ごえ）

ミヤコ蝶々さんは、自宅の庭で育てている野菜に声をかけてやるのだそうである。花が咲けば誉める。「立派な花や、よう咲いたなあ」。実がつきはじめてたら励ます。「あんたら、どないや。頑張らなあかんで」。誉めれば花は一層よく咲くし、励ますと実は大きくなる。食いたいといえ、野菜が喜びに震えるそうである。

モントリオールのショッピングセンターに、フロリダ産の観葉植物ベンジャミンが二本運ばれてきた。一本はサンルームの噴水の側に置かれ、注意深く水を与えられていたが、二日もしないうちに萎れはじめた。同じサンルームに通じる人通りの多い通路に置かれたもう一本は、輝くばかりの活力を保ち続けた。「通りすがりの人たちが賛美してくれるのが、ベンジャミンにはうれしいのですよ」と栽培責任者は胸を張って言った。

カナダ人牧師E・カンビーは、小麦にバッハのバイオリンソナタを聞かせて栽培したら、66%も増収があったという。しかも収穫された小麦は、ほかのより大粒で重かったそうである。（以上「読むクスリ」から）

米粒を水に浸して、一つには毎日「ありがとうと声をかけ、一つには「馬鹿野郎」と声をかけ続けたら、ありがとうといった方は、発酵してよいこうじができた。馬鹿野郎といった方は、真っ黒く汚くなって、鼻が曲がるような臭さだった、という実験結

果の報告もある。

この話、真偽のほどはいかがでしようか。「まさか植物がそんなことはあるまい」と一笑に付される人もいるでしよう。しかし、事實は事實として認めなければならないという科学者達もいる。現代の科学ではそこまで究明されていないだけかもしれない。逆に、植物の能力を知らない人間の浅知恵・思い上りが笑われているのかもしれない。

それはさておき、江戸時代から日本では、植物には「かけ肥をかけよ」といわれているようである。人が話し掛けてやるのが何よりの肥料。人間の気持ちに應えてすくすく育つ、というのである。いわんや万物の霊長、人間の子どもなら、なおのこと。その子の成長にいかばかりの「かけ肥」になることであろう。赤子でも、いやお腹の中にいる胎児でさえ反応するという。

老いも若きも人はみな、かけ声がかけて肥。

人は後から挨拶される人になれという。なら、後から挨拶しよう。

思ひかける分だけ思ひかけられる。

今日もかけてあげよう優しい言葉。

花には水を

人には笑顔を

故郷は永遠の宝

平成五年四月に那間小学校に着任した。ユカテヤー。ユカテヤー、島カティムデイティ・・・と会う人ごとにそうおっしゃってくださる。14年ぶりに帰る故郷は、私を喜んで迎えてくださる。最後を母校で奉職できるこの果報、この有り難さ。老父母、家族ともども感謝にたえない。「士は、己れを知る者のために死す」。ならば私も全力を尽くし、燃え付きようという思いを強くした。

・ 一日を楽しみむ人は、部屋に花を生けよ。

・ 一年先を楽しみむ人は、庭に花の種子をまけ。

・ 十年先を楽しみむ人は、山に木を植えよ。

・ 百年先を楽しみむ人は、人を育てよ。

島興し策はいろいろあるが、究極は「人」である。島持ち、国持ちする子供を育てなければならぬ。その子どもにタマシをクレルのは学校の先生である。島出身の先生が減り、島外から来てもらっている。その先生方は見ず知らずの土地、親・パラジのいない島に不安を抱きながら来ている。先生方を厚くもてなし、子弟の教育に打ち込んでもらうことがまず大切だと思う。中国は、先生を尊敬しよう。と9月10日を「教師の日」と定め、「尊師重道」をすすめている。また、

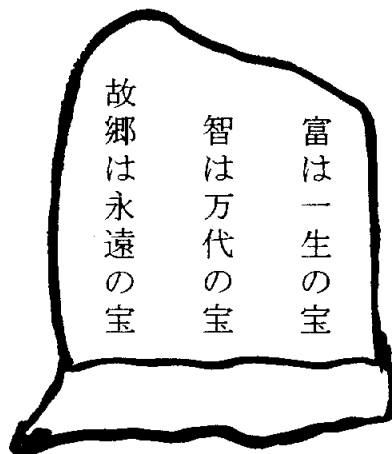
山口県の和木町は「先生の日」を設けて大切にしている。

今、那間小の子供は、幼稚園児も含めて百八十五名（平成五年四月現在）いる。私は毎朝校門に立ち、この二十一世紀からの使者達を迎え、「お早ようございます」という元気な声を聞くのを何より楽しみにしている。

那間小は、入学児がだんだん減り、末が思いやられる。これは、若者が鉄砲玉になり、帰って来ないのが一つの原因である。

卒業して出ていく若者が、帰ってきたくなる故郷にしなければならぬ。また、そう思う子供を育てなければならぬ。歓迎していただいた万分の一にこたえるために残る教師生活を捧げたい。

血につながる故郷 心につながる故郷
言葉につながる故郷 親や一プジのねむる故郷
ふるさとは永遠の宝



（平成5年4月）

負は砥石

甲子園の高校野球は、地元の声援を受けて盛んである。全国各地（400余校参加）の予選を勝ち抜いてきた49校の球児達である。ある有名な校の野球部員は、200名を越えるという。これらみんな甲子園を夢見ている。しかし、予選の選手にもなれず、3年間玉拾いで終わる子もいる。この連中が就職するときに、優秀な正選手よりも、補欠にもならないで3年間玉拾いをした者を欲しがる会社があるという。

1000勝の不滅の大記録を打ち立てた横綱千代の富士は、その陰に何十倍もの負けがあつたはずである。投げられても、突き飛ばされても、なお起き上がる。また投げ飛ばされる。息があがり起き上げなくなるとバケツで水をぶっかけられ、竹刀で叩かれ、またぶちあたつていく。しまいには首根っ子を押さえ付けられ、土俵のまわりを引きづり回される。練習風景は、親には見せられないという。「負けて覚える相撲かな」である。

学校の運動会がある。5、6名並んで「よい、どん」で走る。一番になるのもいれば、ビリもいる。一番になったものはおおいに誉めなければ

ならない。しかしおごり高ぶらせてはいけない。柔道で勝つと、手を突き上げ踊り上がって喜ぶ外国選手がいる。負けて悲しむ相手の目の前でである。大相撲で勝った後、負けた相手に頭を下げるのを見たことがある。あれが勝者の日本の態度だと思う。「優勝」の「優」は「まさる」ともうひとつ「やさしい」がある。横綱双葉山が、69連勝し、安芸の海が70連勝目を阻んだとき、江戸じゅう大騒ぎになった。本人は勿論、まわりも大喜びだった。

しかし、安芸の海の師匠は、「この次は負けて騒がれる力士になれ」と論じたという。

ビリになったときの親の言葉が大事。「あなたは、走りは駄目だけど、○ができるから」。「精一杯走り通したからお父さんは満足だったよ」。「もうちよいだったね。この次頑張れ」。負ける訓練をしていない子がすぐキレる。世の中には人に笑われて覚えることが多い。「負」をマイナスのままにするかプラスにするかは本人と周り次第である。

与論の諺に、「ウセーラバ ウセーリ フナサバフナシ フナーシダーヌマイヤ アブシマクラ」というのがある。これは「どんな嘲笑にも耐えて、

なお栄えてみせます」というたくましい魂を歌い上げたものである。絶海の孤島と論島、台風、旱魃、あらゆる苦難を乗り越えて生き抜いた先人の値千金の人生訓である。この「負こそ砥石」の精神を受け継がせたいものである。

煩惱キリテイ

(愛想が尽きて)

「煩惱キリテイ」という与論語の表現がある。直訳すると「煩惱が切れて」となるが、意味は「愛想が尽きて、愛想尽かして」に転化している。

人間の興味ベスト三は、セックス、財産、宗教といったら、反論なさいますか。私達はセックスによって生命を創造し、財産によってそれを維持し、それを宗教によってあの世にまで持ち越したいと願っている。

アメリカの心理学者アブラハム・マズローは、欲求五段階説を唱えた。

- 一 生理的欲求
- 二 安全の欲求
- 三 愛情(集団帰属)の欲求
- 四 承認(尊敬)の欲求
- 五 自己実現の欲求

赤ちゃんは、生れてすぐにもおっぱいに吸いつく。本能といわれ、生命維持に必要な神様から与えられたものである。

安全の欲求も生命の維持に必要なものである。人間食べなければ生きていけない。食べたら排泄も必要。命を引き継ぐためにはセックスも必要。となれば、生理的欲求や安全の欲求は、生命創造の時に神様から授かったもので当然である。度を超さ

なければ、欲求や欲望として位置付けるのはどうだろうか。満腹すると飽きてくるし、睡眠も際限なく寝ていられるわけでもない。神様は促進と抑制機能を同時に組み込んである。促進だけをとりえて欲求や欲望とし、ややともすると悪ものの扱いにするのは片落ちである。過ぎた部分や足らないところを指しているなら納得である。しかし、第一段階の「生理的欲求」をめぐって、人間は殺し合いまでしている。食料の自給率は、オーストラリアが200%、アメリカ125%、フランス120%と欧米は高いのに比して日本は37%である。食料はもう売らんといわれたら、原爆より、石油より恐いのは男の杞憂だろうか。セックスや財産をめぐる争い。宗教をめぐる戦争、今も続いている。

仏教では一切衆生が、欲界、色界、無色界の三界を輪廻するという。欲界が一番下で普通の世界。これに重なる形で上に色界があるという。食欲と性欲から開放されるとこの色界が見えてくる。何でも美しく見えるところで、その一番上が「有頂天」だそうである。それはもうこの上なく美しいものばかりだという。更に上が無色界で、心識のみの世界という。

人間は八万四千もの煩惱があるといわれ、大晦日には百八の煩惱を打ち出して身を清めるといふ。人は煩惱の海で果てなく泳ぎ続ける。

わるものの家族

結婚披露宴の席で祝辞を頼まれ、幸せな家庭づくりということで、次のような話をした。

旦那さんが、テーブルの端っこに一升瓶を置いていた。それを奥さんが「ごめん、私が端っこに置いたのが悪かった」と謝る。すると奥さんが「いや、私が端っこに置いたのが悪いからだ、悪かった」と謝る。それを旦那さんが「気がつけてあるのか」と怒鳴ったら、奥さんから返ってくる言葉は、「誰が端っこに置いたんだ」という言葉が返ってくる。私が悪い」という「わるもの家族」の家庭は、「幸せ家庭」と結んだ。

私の長女が3・4才の頃、外から喜び勇んでかけてきた。庭の出ていた石につまずき転んで、セメントの角に眉毛のところに骨が窪むまでした。かには打って泣き喚いた。そのくぼみは数年間残っていた。祖父は「私が悪い、悪かった、チュムチョイ」と何度も嘆いた。翌

日、祖父はさつそく、そこにセメントをはり、平らにした。

「一升瓶を端っこに置いた私が悪い」と素直に詫びるにはちよつぱり勇気がいる。たいていは、割った非を咎める思いが先にたち、ついつい相手を責めてしまふ。そこで相手の立場にたち、よつてきたる原因にまで思いをいたらせるかどうか。そこまで思いいたすには、常日頃の心がけ・人間修業みtainなものがある。そのようになちよつとした思いに起因し、人間関係の幸・不幸の岐路は、このように思ひ続けたものである。

そこを、孔子は「恕」、釈迦は「仁」、キリストは「愛」だと言つたように思える。

陰陽

万物の化成は、陰・陽二種の気の消長によるという中国の哲理がある。

さらに五行、木・火・土・金・水の五つの元気が天地の間を循環流行し、万物組成の元素とする。木・火が陽で、金・水が陰で、土が中間。

干支の兄（え）が陽で、弟（と）は陰。

日・春・南・昼・男は陽、月・秋・北・夜・女は陰。

奇数は陽で、偶数は陰。祝いには奇数が用いられ、悔みに偶数が使われる。山陽に対する山陰、山陰地方の人にはこれを好まぬ人がいるとか。

日常生活の中に、陰陽思想がしみ込み使われている。

学生の頃、原子の構造を教わった。原子は、真ん中に原子核がありその中に陽子と中性子があつて、そのまわりを電子が回っている。陽と陰と中間のものでできている。電気や磁気に陽極と陰極がある。

原子の構造が、陰陽と中間のものでできているのが分かつて、たかだか百年だが、中国では何千年もの昔にこの発想があつたとは、まことに驚きである。

「陽陰」と「陽」が先ではなく「陰陽」としたのはどうしてだろうか。訳があるように

ドウダンミン男は思えてならない。

裏表（うらおもて）。表が陽で、裏が陰。なのに裏を先に言う。よくよく見ると「裏」の漢字のなかに「表」の漢字が入っている。

ヘーゲルという哲学者は、「正・反・合」の弁証法を唱えた。これは、万物の化成は、相反する陰・陽二種の気の消長による、とする考え方に通じるのではないかとドウダンミンする。

酸性とアルカリ性を適当に混ぜると中性になる。

水素の原子は、プラスの電氣を持つ陽子とマイナスの電氣をもつ電子からなり中性である。水は、水素と酸素からなり、水素は爆発的に燃え、酸素はものを燃やす性質がある。二つが一緒になると火を消す水になる。水を電氣分解すると水素イオン（プラス）と水酸イオン（マイナス）になるがくつつくと電氣を帯びなくなる。同じ強さの磁石のN極とS極をくつつけると磁力がなくなり、磁石ではなくなる。

これらの科学的なことが分かったのはたかだか百年このかた。陰陽の考え方は数千年前。ドウダンミン男はほとほと感心する。

唯我独尊（存）

天上天下唯我独尊。

お釈迦様は、生れてすぐに七歩歩き、「天上天下、唯我独尊」と発したという。

人間の染色対数は46本（23対）あり、この中に遺伝子（DNA）がある。この染色体が組み合わせられてできる精子、または卵子はそれぞれ838万8千6百80兆3687億4417万7664とおりになる。さらに遺伝子の組合せとなると（800兆×1000兆）の2乗通りとなり、想像もできない数字になる。1組の夫婦の間でこれだけだから、未来永劫にまったく同じ人間が出現する可能性はない。まさに、天上天下に唯一の存在であるから「尊ぶ」。従つて「唯我独存・唯我独尊」になるのか、とドウダンミン男は思つたり。

前妻は、急に入院しなさいといわれ、三日もしないうちに人事不省におちいり、十日程で死んでいった。二十七歳だった。茫然として何が何だかわからなかった。あの悲しみは誰にもわかるまいと思う。慰めの言葉もたくさんいたいたが聞いていなかった。一ヵ月ほどして電話で「今のあなたには何も言わない」といった近親者がいたが、この人が一番分かつているな、と思つた。

宮崎大学の工学部を受験したとき、三十数名が一教室で受けたが、その中から合

格するのは二名だと聞き、大島から出てきた私などとてもじゃないが・・・と思えた。発表を見たら合格だった。うれしいというようなものではなく、帰り道は体が浮いて足は地面についている感じがしなかった。この嬉しさは誰にもわかるまいと思つた。他人の喜び、悲しみは本当はわからないと思う。

沖縄で父と二人で自炊をしているとき、父がニガウリ（ゴーヤー）料理をして食べさせてくれた。世の中にこんな苦いものがあるものかと思つた。父がおいしいと言いながら食べているのをみて、バカじやないかと思つた。数十年たつて食べてみるとさほどではなく、今では苦さがうまさになった。食卓を囲む三度の食事、家族それぞれの味で互いの味もわからずして分かつた風に誤解しながら食べている。

仏教で六根、すなわち眼・耳・鼻・舌・身・意の感官は、おおよそにおいて同じでも、それぞれ微妙に異なり。唯我独存である。

アメリカの貿易センタービルに、昼の日中、乗客を満載したジェット機が二機次々と激突し、破壊炎上させた。テレビ映像を見ていて現実の出来事の様には思えなかった。アルカイダというテロ集団の仕業とされた。

第二次世界大戦、大東亜戦争、太平洋戦争と人によつて呼び方はまちまちだが、日本軍が「肉弾勇士」と称え、爆弾を抱えて命もろとも突っ込んだ。世界中から狂気の沙汰として恐れられた。

イラクやイスラエル等では自爆テロが頻々として起こっている。自分の命を何と

も思わず、爆弾を抱えて不特定多数の人間を殺傷、自爆する。イスラム教の教えなのか、そこへ走らせるものは一体何なのかわからない。わからないことの筆頭である。「命」が「消耗品」と同様である。ひとりの命は全地球より重い。自分の命はなにもものにもかえがたいと思っている人が、ある日突然命を平気で捨てるテロリストといっしょくたんに道連れにされたんではたまったものではない。

自爆テロを敢行することによって、自分の存在を示し、尊重されたいと思う「唯我独尊（存）」だろうか。

犬養首相は銃撃される直前に「話せばわかる」と言ったが、今また養老孟司は「話せばわかる大うそ」と言っている。養老猛司は、脳を解剖研究し、そこから導き出した言葉である。

古の昔から戦争は絶えないし、国際間の紛争、宗教間紛争、親殺し、子殺し等々。物の見方、考え方それぞれがそれぞれに唯我独尊。

広島や長崎に原爆が落とされた。被爆した方々は気の毒である。今もその認定や保障請求が韓国人など外国人からもある。爆弾を落としたのはアメリカなのに、なぜアメリカに請求しないのだろうか。落とした国はおとがめなしで、落とされた国は被害をこうむったうえ、にさらに平謝りに謝って保障をする。ドウダンミン男には、これもわからない。

世の中にはわからないことが多すぎて、考えているとノイローゼになりそうであ

る。「話せばわかる」ことと「話してもわからん」こととがある。話してわかるのはある程度のところまでで、究極においては、「話してもわからん」ことが多いとドウダンミン男は、ドウダンミンした。

ドウダンミン男の自慢のコピー

人生は自作自演、一回限りのドラマである

眼横鼻直

道元禪師が、中国の宋で五年間修業を積み帰国した。中国で得たものは一口で言うとは何ですかの問いに、「眼横鼻直」と答えている。これは、簡単に言うとは中国の人も目は横についていて、鼻は真つすぐだったということだ。これを聞いた人は期待はずれし、不可解だったに違いない。

私がかつてつかえた久永校長が、小学生に講話した題材である。熱情を込めてかみくだいて話されたが、正直言つて小学生にどれだけ分かつただろうかと思つた。あれから二十余年忘れていたが、公職を引き、番頭をし、世の中の人を見てみると、ふと当時の「眼横鼻直」が思い出された。

道元禪師は、神童といわれ、十二、三歳のときにはすでに中国の古典はことごとく読破した天才である。それがさらに禅の本場中国で五年間も修業した挙げ句の結論である。どれだけの深みと重みがあるかは、凡人の私などには推し量れるものではない。「わかる」などというのは畏れ多く、恥かきものである。禅では「不立文字」といわれ、心は言葉や文字で伝えられるものではない。それだけに奥深いものである、と言ひ切っている。いかに研究、思索、修業をし

た師と弟子の間でもある。

釈迦が靈鷲山の山上で座に登り、大梵天王から受けた蓮華の花びらを、ただ黙って拈（ねじ）りもてあそんでおられたが、並いる大衆は誰一人、その意味がわからなかった。ところが摩訶迦葉（まかかしよう）だけが、にっこりと微笑した（ここから拈華微笑（ねんげみしよう）の語が生れた。その時釈迦は、「われに正法眼蔵涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付す」と宣言された。このように、心は、文字や言葉ではなく「以心伝心」でしか伝わらないとしている。丁度周波数が合ったものだけに伝わるように。道元は、正法眼蔵涅槃妙心を釈迦、迦葉、達磨、如浄から正統に受け継いだと自信を持って人に伝えた。

「バカの壁」（養老孟司）という本に、話せばわかるというのは大うそと書いてあった。なるほどである。話してわかれば、戦争など起こるはずはない。平和憲法を守れ、武器など持たなくてよい。どこの国が侵略してくるといのかと唱える目出度い人、偉い人の多いこと。

平成十五年の衆議院選挙で、自由民主党は比例区では七十三歳以上は例外なく認めないとした。それに中曽根や宮沢元総理が反発した。中曽根は八十五歳、宮沢八十四歳。中曽根は比例区終身一位だった。六十三歳の小泉総理が兩名の

首に鈴つけ役になった。宮沢は話して分かった。中曾根はわかるどころか、「恩知らず」と言わんばかりに罵り、悪口雑言した。名総理大臣、勲一等菊花章の最高勲位を授かった人である。以後男にはテレビにでる中曾根は眼横鼻曲に見える。

ガソリンスタンドボーイをしていると人の品位というか、型というかが見える。車のタンクの鍵をあけて待つ人、鍵を渡して立っている人、なんにもしないで平然としている人。満タン入れさせてから「付けといてくれ」と言っておきながら、請求してもいっこうに払わない人、一円足りなかったといって恐縮して早速持つてくる人。

与論でも、何百万、何千万とふんだくる人がいる、誠の島というが、嘘だよと話す人がいた。半身不随になつて、自由にならなくなつて初めて、人の心がよく見えるようになったと話す人がいた。人は置かれてゐる状況によつて、見えること、見られることの違いの大きさが大きいことが見えてきた。今ある状態がそのまま人間は眼横鼻直だからとみればいいのか。教育界に長く身を置き、いいことばかりを言い、思つてゐた男には、いまさらながらそうだったのか、と思ひ知らされることが多い。大風呂敷を広げ、大嘘を大衆の面前で公言し、

鬼 手 仏 心

医者が病人にする手術は、体を切り開き鬼のように残酷にみえるが、病人を救いたいと願う仏のような慈悲心によること。

教育や賤の要諦でもあると思う。

大東亜戦争前・戦中、全体主義のもとに、特に軍隊で体罰が行なわれた。その反動としてルソーの著書「エミール」に象徴される自主性尊重の美名のもとに大あま教育が吹聴された。というより、戦前の全面否定・絶対悪の駐留軍の押しつけである。自由・平等・民主を絶対善とした。風が吹き抜けるあばら屋で、それも村民が持ち寄った材木で手作りした掘っ立て小屋の土間に座って教えてもらったものは「民主主義」とは何か。そのことだけを繰り返し教えられた印象しか、昭和十一年生れのドウダンミン男の頭には残っていない。

男は、昭和三十五年の鹿児島大学教育学部卒業だが、在学中、土器屋教授から「ひこばえ精神」の講義を受けた。非常に斬新で感銘深いものだった。その教室は人気が高く、「ひこばえ」同好会が後々まであったように思っている。ところが数十年後教頭になった男は、PTAのある役員から「あの頃の鹿大教授が、社会主義思

想教育をしたから、教育が駄目になった」と聞かされ、男はまた驚き、考え込んだ。アメリカの占領統治軍が育てた労働組合の功罪は、甚大であつた。威勢のいいものに昔陸軍、戦後国鉄労働組合といわれた。戦前教師は聖職者？と自負し尊敬を受けた。日教組ができ、労働者と標榜し、文部省と激しく対立した時代もあつた。学校教育は、その風下にあつて揺れ動いた。

教育基本法に体罰禁止条項が明記され、体罰を加えた教師は処罰される。以前は仏心さえあれば、少々の体罰はいいではないか、という容認風潮があつた。しかし社会の目が厳しくなり、許されなくなつた。教師はそれにおびえ、一部にはそれに付け込んで生徒が先生に「体罰をやつてみい」と脅すことさえあるという。

昭和四十年代保護者から「シシヤピチュヌムヌ、プニヤウヤヌムヌ（肉は人の者、骨は親のもの）」といわれている。骨さえ折らなければおおいに鍛えなさい」と励まされ、男はいい氣になつた。「愛の鞭」と称し、男はカラ竹の根子の節がもりもりしたのを持ち歩いた。崇高な鬼手仏心には及ばず、宿題をさせるだけの強制手段だったのではないかと反省する。

男は教職員時代にしたことを悔い、思い出しては恥じ入るばかりである。当時教えた生徒が長じて、鬼とまでは言わないにしても、「相当やられた」となじる。「ヤヴラ先生だった」と口々に言う。同窓会やクントウグンジュウのお祝いに招かれる

ことがあるが、男はかたくなに断つたこともある。男は懐かしさはあるが、尻が引けてくる。当時の話が出てくるとさえぎり、話を切り替えようとするが、やはり続ける。男は居たたまれなくなる。

自慢げに「私の教え子」というのかつての先生がいるが、羨ましいかぎりである。私めは「教え子」というのは極力避けたい気持ちである。

当時の悪業の心罰と受けとめ、あまんじて被るしかない。

古来の日本社会では、子供は罪汚れない無垢なのだという觀念が底流にあつて、躰けにあまいといわれる。欧米諸国では、特に公衆道徳は幼児のときから厳しく躰けられるという。欧米では幼児のとき厳しくし、成長するに従い緩くする。それに対して日本では逆だといわれる。男の頭が欧米文化化されたせい、欧米型がいいと思う。幼いときを守るべきは守らせ、欲望を押さえ、自己コントロールできるように躰けておくことは、人格財産となる。鬼手仏心の母親に育てられた子供は幸せである。

孫が遊びにくると殊のほか可愛い。可愛さが先立ち、「鬼手仏心」の前に男は立ち往生する。じいちゃんばあちゃんに育てられた子供は、甘やかされて駄目になるといわれる。その言葉が頭をよぎる。

「言うは易く、行ふは難し」である。白髪頭になっても男は悩む。

ヤンミヤー（山猫・野放し猫）

店の商品として置いてあるソーセイジやパンがなくなったり、袋が食い破られてしていた。鼠の仕業だろうかと思っていた。ある時、二階に猫が行くのが見えた。不思議に思つて追つていったが見当らなかつた。さらに三階にいった。そこにもいなかった。飛び降りたはずはないがと思ひながら、そのままにしていた。数日したら子猫があがつて行つた。さてもさてもと思ひ、今度は忠臣蔵の吉良上野を探すがごとくに探した。にやんとダンボール箱の山のなかの一つに、子猫七匹と親猫がうずくまっていた。親が言い付けたのか子猫は泣きもしなかつた。ソーセイジを夜な夜な楽々運んだのである。猫は乳離れさせるまでに、七回巢を移し替えるという。私の店の二階は、敵はいないし、ぬくぬく住みごころはいいし、食べ物は一階にあるしで、わざわざ移し替える必要もなかつたのであろう。

近所に猫が数匹いる。昼間こっそりソーセイジを盗つていく。台所か

ら魚をゴツソリやられたこともある。誰が飼っている猫だろうか、飼主はすっかりしてもらいたいと腹立たしくなる。近ごろは小石を準備して、来たらそれで打ち払うようにしている。それで今は、私の顔を見たり一目散に逃げる。昔は鼠退治に猫を飼っていたが、近ごろ猫が鼠を捕る話しは聞いたことがない。

【野鴨の教え】

ジーランド湖畔には毎年、季節になると野鴨たちが渡ってきます。湖の近くに一人の善良な老人が住んでいて、遠い国からはるばると渡ってきた鴨たちをいたわり、親切にもせつせと餌を運んでいた。野鴨たちは餌が豊富に与えられ、しかも親切な庇護者のいるこの湖がすっかり気に入ってしまった。

そもそも野鴨は野性の渡り鳥ですから一つの場所に住み着かない。ある季節を過ぎた後は、次の生活のために数千キロも離れた湖へ飛び立っていく習性を持っている。ところが、ジーランドの野鴨たちはこんな

に安全で餌も豊富な場所があるのだから、何も大変な苦勞をして次の湖に飛んでいく必要はないと思うようになった。そして、とうとうこの湖に住み着いてしまった。

こうして野鴨たちは、毎日楽しく、健康で、豊かな日々を過ごしていた。そしてこの苦勞の連続であつた長旅の記憶はいっしか薄れていった。そんなある日、湖に餌を運んでくれる親切な老人が死んでしまい、野鴨たちは明日から食べる餌がなくなつてしまつた。仕方なく、彼らは餌のある別の湖に飛び立とうとしたが、どうしたことか、かつて何百キロ、何千キロと飛べたはずの力がまつたく失われていた。彼らはもはや飛ぶことはおろか、駆けることすら満足にできないほど、醜く肥つていたのだ。やがて嵐がやってきて、湖を囲む山々から激流が流れこんできた。他の渡り鳥たちは、飛び立ったり、安全な丘に駆け上がったりして、やすやすと難を逃れたが、肥つた野鴨たちだけは、なすすべもなく激流に流されて滅んでしまつた。

かつて成人病と呼ばれた高血圧、糖尿病、動脈硬化などは、今では小
学校生までかかり、生活習慣によるものとされて、生活習慣病と呼ばれ
ている。肥満に悩み、ダイエットがおもてで、ダイエット産業が繁盛
である。

鼠を捕る本能をなくした猫、飛べなくなった野鴨たちを人間様は笑え
るだろうか。かく申すドウダンミン男は、肥りすぎを医者から注意され、
血圧とコレステロールの薬を飲み、出張ったぶよぶよの腹を抱えている
哀れさである。食い過ぎ、飲みすぎ、運動不足、どれ一つ本気で実行し
ない怠慢ぶり。現金強盗、重機を使って自動現金支払機をぶっこわす、
「おれおれ」と老人からの金の詐取、小遣い欲しさに自分から出会い系
サイトにアクセスして身を売る女子中学・高校生。電話を使った不当請
求。金のために人を平気で殺す悪魔。苦勞して糧を得ようとしないうな
ムヌ（悪人）どもの多いこと。物はあふれ、文明は発達し便利にはなっ
たが、安心・安住が脅かされる物騒な世の中になった。ヤンミャーや野
鴨はいいほうだ。ヤナムヌの鴨にならないように気をつけよう。

睡眠時無呼吸症

運転士が居眠りしたまま、新幹線が八分間走り、自動制御装置で定位置の四百メートル手前で止まる事件が起こった。副操縦士が運転室に飛び込み、起こされるまで眠りかけていたという。検査結果この運転士は、睡眠時無呼吸症だったようである。これは睡眠中無呼吸におそわれ、眠りが浅くなる結果、仕事中に居眠りしてしまうという。

私が高校生のとき、帰省途中、亀徳港に1時間ほど停泊した。当時は、上陸するにはさらに小型で手漕ぎのハシケに乗りついでの上陸だった。そのハシケは陸と往復するというので、いったん陸に上がり、船酔いを覚まそうと思つて乗った。本船に再び返るときには呼んでください、と船頭に頼んでから上陸した。昭和三十年代街灯はなく暗かった。栈橋に積んである材木の上に座り、休んでいた。そのうち寝込んでしまい、目が覚めたときはハシケは行ってきた後だった。あわててそこにいたハシケの人に頼んだが、子供だと馬鹿にして色よい返事がなかった。「返るときは呼んでくれ」と頼んであった事情など話し、頼み込んだらかわいそうに思ったの

ピチュヌ フトウバ (人の言葉)

与論の諺に、「イシン、ハニン、クチュツシユウシガ、ピチュヌフトウボ―クタジテューサ(石も金も朽ちるけど、人の言葉は朽ちないそうだ)」というのがある。善につけ悪しきにつけ、人の言葉というのは心にしみて永遠に残ることを言い得て感服する。

言葉が印象深く心に残る度合いは、親子兄弟や親密度が深い程深い。掛けられた言葉が一生心の傷になることもあるし、生きる支えになることもある。言葉の影響度は信頼度と相関関係にある。

自分自身を振り返ると、いたく傷つけたことばかりが思い出されて悔やまれる。そのことが自分自身を傷つける、まさに「身から出た錆」である。

信の字は、人と言を合わせて、言葉と心が一致する、まことの意を表す。人の言葉は、言行一致してまことになる。まことであるから信じ、信じられる。これによって人と人が結ばれ、社会を成り立たせている。

「言」は、「人」と結びついて価値が出るし、価値の高低差も出てくる。文字や音声にすると全く同じでも、誰が言ったかによってその価値や感銘度が違ってくる。つまり、言葉は言った人を伴っている。「書き言葉は、話し言葉に及ばないし、話し言葉は行為には及ばない」。その人が言っていることと行為が異なる場合は、行為の方

を人は取る。言葉にはその人の経歴さえつくことがある。

日本は、言霊の幸（さき）わう国と美称される。言葉には不思議な力が宿つてい
ると思われた。

与論の古くからの習俗に、子供が生まれたら七日目までに親族が集まり、その子
を前に主人が祖神に祈禱をする。「トウツトオトウガナシ、お陰さまで男の子が生ま
れて、祖父の名前を取つて、トウラと名付けますから、塩一升、粟一升、百二十歳
のクレー（位）あらしめて、チュラサカイ、チュラキバイシミテイ、ウブンクリテ
イタバーリ、トオウツトオトウガナシ」と、大意は以上のような祈禱をする。ここ
のキーワードである「クレー」は単なる「位」ではなく「絶対なるものからその生
命に与えられる靈氣」を意味する。その子の運命付け、幸運の靈氣を吹き込む儀式
である。子供の名付けは親の願いを込めた靈氣付の意味があるように思われる。

ヒトは靈長類といわれるように、善につけ悪しきにつけ、言霊に引つ掛かる。体
の具合が悪いと思ひ、病院に行き、検査をしてもらひ、名医といわれる医者
の診断で、どこも悪くないと診断されたとたんに元氣になった話はよく聞く。反対に
十人が口裏を合せて、「君、顔色が悪いね、具合が悪いんじゃない」と次々に言う
と、しまいにはおかしくなるといわれる。

人は、一つの言葉で泣き、一つの言葉で笑う。一つの言葉で喧嘩し、一つの言葉
で仲良くなる。

人の言葉は「ひと」と「他人」の二通りがある。自分が発した言葉は自分が一番早く、大きく聞いている。言葉は心を表すが、心は言葉によって作られる。きれいな心を持ちたければ、きれいな言葉を発することである。

与論の諺に、「千万銀シンホーランヌ ナーフトウバ（千万金でも買えない、ただの言葉）」とある。こころ、こころ変わる心にあつて、朽ちない言葉、自分が一番影響を受ける自分の言葉、心したいものである。

一つの言葉

人は 一つの言葉で 笑い
一つの言葉で 泣く

人は 一つの言葉で 喜び
一つの言葉で 怒る

人は 一つの言葉で 愛し
一つの言葉で 憎む

人は

一つの言葉で
一つの言葉で

踊りだし
打ち沈む

人は

一つの言葉で
一つの言葉で

生き返り
絶望する

この不思議な力を持つ 一つの言葉

エンヌフトウバ コレクション

与論島は、外海離島なので、古き良き言葉が訛らずに温存されてきたものと思われる。語り継ぎたい語である。共通語に置き換えようとするたびたり合致するものはないが、あえて言い換えてドウダンミンで解説した。

トオトウガナシ …… ありがとう

神前に額突き祈願奏上の冒頭に「チットオトウガナシ」と言う。

「チツ」は接頭語。「トオトウ」は尊い。「ガナシ」は愛しい。

「トオトウ」は、死者の祭りや神様祭りの名詞形として使われ、祈祷の意味にも使われる。「トオトウガナシ」は、「神の恵みほどに尊いことです」の意味に思える。ある方言学者が、一番美しい方言を一つだけといわれたら、与論の「トオトウガナシ」である、と。

オウ …… はい。目上の人にする返事だが、敬虔さが多分に含まれる。

バチウトウシ …… 罰落とし

贈り物をするときに、私に罰を与えないほどのささやかなもの

ガンチガディ …… そんなに言われるほどではない

明るく気軽に相手を許す気持ちを表したもの。 not at all と同義

ガラミーチ …… 快諾。相手の要求を喜んで承諾するときの言葉。

パジー …… 畏れ入り

親パジー、世間パジー、人パジーのように使う。

ウシヤガラチタバーリ …… お仕上がらして賜れ

「タバーリ」は「賜れ」で、随所に頻繁に使われる。

ヲウガミヤービラン …… 拝みそうらわん

ヲウガデイイチヤリテイ …… 拝顔の榮譽に浴してよかった。

ヤグミサ …… 恐縮

キムヤデイ …… 心痛

キムグルシヤ …… 心苦しい

ドウグルシヤ …… 身の置場に困る気持ちを言う。

チュンチャビテイタバーリ …… 可愛がってお許してください。

ヌチグスイ …… 命の薬

クワツチャー シャービタン …… ご馳走になりました。

インゲータン …… 食べて元気を取り戻した。生き返った。

メーラビ …… 雅びな娘

ナーヤー …… さようなら。余韻を残して「もう、ね」

タンデイ …… お許しください

マルケー …… 和作り。心合わせ。

カチャーシー …… 喜びも悲しみもかきまぜてみんなで踊る乱舞。

ユイタバー …… 結い同士の助合。

ムエー …… 助合い

ウリジン …… 潤いの時季。梅雨期頃

トオトウビー …… 神前での座り方。正座

【特異な言葉】

ピッチェーパデール …… 長所も短所もある。

ウデーヤパダパダ …… 役職をやめてしまったら、それつきりである。

ヤシンプー …… 安らかに冥途へ旅立つ幸運

ピラチカマクラシミテイタバーリ …… 芋掘りの柄を枕にころつと死なせて

ください。病に伏す患いを避け、働いているうちにころつと死

ぬ願望を言ったものである。

言葉コレクション

1 夜が明けてから太陽が昇るのではなく、太陽が昇るから夜が明けるのだ。

2 幸せだから笑うのではなく、笑うから幸せになるのだ。
楽しいから笑うのではなく、笑うから楽しくなるのだ。
悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しくなるのだ。

3 心がきれいから言葉が美しいのではなく、
言葉が美しいから心がきれいになるのだ。

4 朝の来ない夜はない。日はまた沈む。

5 盛者必衰。生者必滅。

6 病気とは、健康と健康の架け橋である。
病気とは、体が病気と闘っている健康状態。
体がやんでいる場合は「病」、気まで病んでいる場合が「病気」

7 病氣もうつるが、元氣もうつる。にっこりも、むつつりもうつる。

8 惚れてしまえばアバタもエクボ。飽きてしまえばエクボもアバタ

9 マリリンモンローもレントゲンで撮れば同じだよね！

10 人間は死んでから何日で腐るか。生きているときから腐っているのもいる。

11 長生きしたい人はいるが、年をとりたいという人はいない。

欲張りもほどほどにせー（閻魔大王）

12 医者には誰にでもなれるわけではないが、慰者は誰でもなれる。

13 かんしゃくのくの字捨てれば、感謝になる。

14 こだわるとは、捨てることなり。（妻にこだわり、いかに多くの女性を捨ててきたことか。なーんちゃって！）

1 5 愛妻弁当（夫） 愛夫弁当のつもりだが（妻）

1 6 愛妻家があつて、愛夫家がないのは不平等

1 7 妻はつまらん、母はいい、ママになるから。

1 8 僕は世界で二番目の料理人になる。
一番はお母さんの手料理だから。（親孝行息子）

1 9 この世に美しい子どもは一人しかいなくて、どの母親にもその美しい子どもがいる。（親馬鹿）

2 0 自分がやらねば誰がやる。今しなければいつやる。
心配するな、誰かやる。心配するな、いつかやる。

2 1 儲かる話に乗るな。儲かる話は決して他人には言わないものである。

2 2 本人は話したが、人は聞きたがらないのが自慢話

23 不幸話は毒だが、失敗談は花である。

24 花火を輝かせるのは闇夜、言葉を輝かせるのは沈黙。

25 行く言葉が美しければ、来る言葉も美しい。
する挨拶が美しければ、返る挨拶も美しい。
(人生はブーメラン)

26 徳(とく)が濁れば毒(どく)になる。
口(くち)が濁れば愚痴(ぐち)になる。
意志(いし)が濁れば意地(いじ)になる。

27 道に迷うのは、道があるから。

28 死にたくなければ、一度死ねばよい。

29 2と1の差は1だが、1と0の差は無限大。

30 他人と過去は変えられないが、自分と現在に変えられる。

3 1 他人が親友になるか、知人になるか、はたまた犬猿の仲になるか、ふるいに掛けるのはあなたの言葉だ。

3 2 人にはわかつて自分では気づかないのが慢心である。

3 3 人は見ているが自分には見えないのが自分の顔である。

3 4 結婚していない結婚相談員。国民年金払わないでいて払えという大臣。よくある話じゃないか。

3 5 日本ではたくさん買うから値段をまけろという。
アラブでは、そんなにたくさんいるなら、それだけ大切なんだろう。値段は倍だ。ワイタンデー。ハーキツチャメー。

3 6 梅干しは、酒も飲まずに顔を赤くして、年をとらずにしわ寄せて、もとをただせば梅の花、鶯泣かせたときもある。

3 7 嫌いなお方の親切よりも、すいたお方の無理がいい。

3 8 世の中には物忘れのひどい男がいるものだ、引越しのときこともあるが、
に自分の女房を置き忘れていったそうだと。

いやいやもつとひどいのがある。女房どころか自分自身を忘れているのが
いる。(大きい声では言えないが、その名は竹下徹)

3 9 誕生日おめでとう。……いや、母のお産慰労日だよ。(親孝行)

4 0 頭を切つてこい。……いやだ、そうしたら、死んでしまうじゃないか。

4 1 病院で注射を打つてきた。……誰に注射したのか、君は医者かね。

4 2 私の女房の油揚げだ、食べてくれ。……とんでもない人の肉食えるか。

4 3 君は何で人を殺した。……私は引き金を引いただけで、殺したのは玉だ。

4 4 人は見ているが、自分だけ見たことないもの? ……自分自身の顔

人生は、自作自演、一回限りのドラマである。

プウク人（奉孝人）

若い頃、いささか自信もあったので申し出て奉孝人（棺桶を墓まで四名で担ぐ人）をした。肩にずっしりきて、想像以上にきつかった。今は車に乗せて墓の入り口まで行くから楽である。

父の葬儀のときは、あえて孫達に担がせた。「受けた恩返しにそれ位の奉孝はやれ」と言つてさせた。慣れないし、きつかっただろうがいい体験になったと思う。

「水を飲むときは、井戸を掘った人の恩を思え」という中国の諺がある。誕生日は、母の産みの苦しみの日である。ケーキにローソクを灯し、ハッピーバースデーとケーキよく騒ぐときは、生死をかけ悶え苦しんだ母の恩を思わねばならぬ。

市販の「葬儀記帳」には、プウク人は「奉公人」と書いてある。なるほどそうかもしれないが、受けた恩に対し、孝行を奉るという意味で「奉孝」という字をあてた方がより適切ではなからうかとドウダンミンするのである。「担ぎ人」としないで「奉公人」としたのは与論の先人の思いのこもった叡知だと思う。

正座のことを与論語では「トオトウビー」という。「ビー」は座である。神